

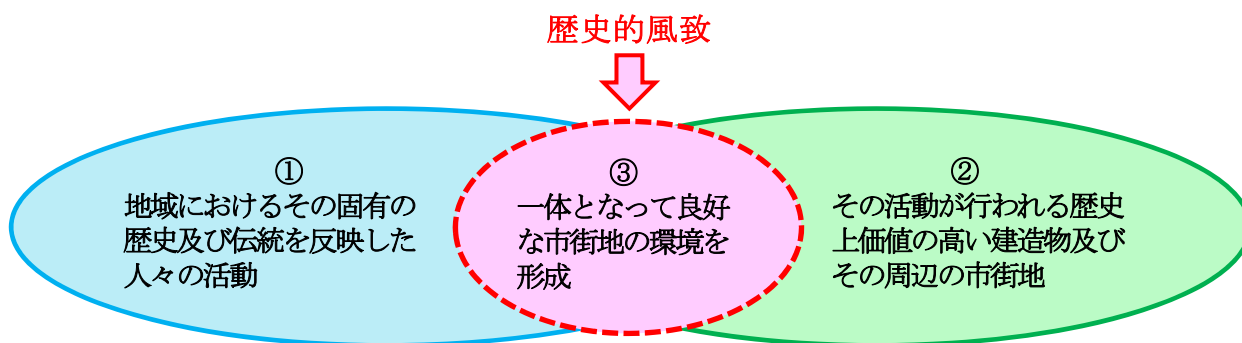
第2章 大館市の維持向上すべき歴史的風致

○大館市の維持向上すべき歴史的風致

大館市には、米代川とその支流の流域に広がる豊かな自然環境の中でつくられてきた歴史と文化があり、先人から受け継いだ活動や歴史的資産が数多く残っている。

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地環境」と定義されている。そのため、下記の①から③の要素をすべて備えていることが、歴史的風致となり得ることとなる。

- ① 大館市固有の歴史や伝統を反映した活動が、現在も行われていること
- ② ①の活動が歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地で行われていること
- ③ ①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること



歴史まちづくり法に基づく上記の条件を考慮し、大館市における維持向上すべき歴史的風致として次の六つを選定した。

- ① おおだてじょうか まちわ 大館城下の町割りに残る歴史的風致
- ② おうぎたしんめいしゃ 扇田神明社をめぐる歴史的風致
- ③ たしろだけ さくうらな 田代岳の作占いに見る歴史的風致
- ④ あきたいぬ 天然記念物「秋田犬」を守り育てる歴史的風致
- ⑤ ほうおうざん 鳳凰山周辺に見る歴史的風致
- ⑥ あさり とっこ 浅利氏ゆかりの独鈷の歴史的風致

それぞれの歴史的風致は次頁以降で述べていく。

おおだてじょうか まちわ
1. 大館城下の町割りに残る歴史的風致

かつての城下町であった大館の中心部には、秋の「大館神明社例祭」と、冬の「大館アメッコ市」がふるさとの祭りとして受け継がれている。その起源は、大館城の周辺に開かれた「市」に源流があり、城下町に配置された町人町に花開いた商業文化とともに育まれ、現代に伝えられてきた。

16世紀初めの大館地方は、浅利氏が十狐城を拠点に数多くの城館を配置して治めていた。大館城は16世紀後半に浅利勝頼が築城したとされているが、この頃は、浅利氏、安東氏、南部氏、秋田氏などの勢力が拮抗し、大館城の支配者は激しく入れ替わっていた。この頃の城下に開かれた「市」が大館の商業の起源と語り伝えられている。

やがて17世紀に入ると、佐竹氏とともに国替えで秋田入りした小場義成が、大館城の城代となり、のちに佐竹西家を名乗ることを許され、260年間この地を治めた。この間に形成された城下町が、その後の大館市の礎となり、地形や地名が現在も受け継がれている。



大館城本丸跡(桂城公園)北側からの眺望

(1) 大館城下の町割り

①大館城代を務めた佐竹西家

大館城の初代城代小場義成は、常陸佐竹氏の一族で、慶長5年(1600)まで茨城県常陸大宮市に所在する小場城の城主であった。義成は慶長7年(1602)に佐竹義宣の国替えに伴い、ほかの家臣とともに秋田入りした。小場義成は、浅利氏の残存勢力を抑えるとともに、津軽・南部両国境の備えを固めるため、慶長13年(1608)大館城に入城した。慶長15年(1610)、正式に大館城代となった小場義成は、さっそく城郭の改修と拡張を行い、同時に町割りにも着手した。

元和元年(1615)幕府の一国一城令が発令されたが、秋田藩では、大館城と横手城は久保田城の支城という名目で幕府から残置が容認された。

その後徐々に地盤を固めた小場氏は、万治年間(1658~1660)に「佐竹」を名乗ることを許され、のちに「佐竹西家」と呼ばれるようになり、大館佐竹氏は、第11代義遵まで約260年間、大館城代を務めた。

②昔と変わらない大館城周辺の地形

大館城跡は、大館盆地の中央部に舌状に突き出た段丘上にあり、米代川支流の長木川左岸に位置する。城跡を中心に東の大館八幡神社から、西の愛宕神社に至る北側は崖状の急斜面をなし、北側(羽州街道が津軽に続く方面)が一望できる環境にある。つまり、矢立峠を越えて来る津軽方面の敵、米代川下流方面からの敵の動向を遠方から察知できる環境にあるのが大館城の位置である。

大館八幡神社から愛宕神社まで続く崖状の地形は、今もほとんど変わらない形で残されている。それは、享保13年(1728)の城下絵図、昭和23年(1948)と平成28年(2016)の航空写真を見比べて確認することができる。

最初に大館城を築いたのは浅利勝頼で、16世紀後半(大館戊辰戦史)のことと言われている。その後17世紀に入り、大館城代となった小場義成によって新たな城郭が整備されたが、幾度かの火災もあり、最後は明治元年(1868)戊辰戦争の際に大館佐竹氏第11代義遵が自ら火を放ち落城した。

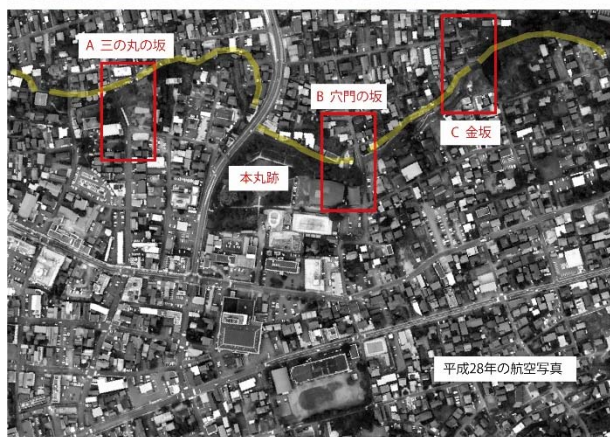
本丸跡には、明治35年(1902)に高等小学校が開校し、のちに桂城小学校の敷地として昭和29年(1954)3月まで活用された。昭和31年(1956)には桂城公園として供用を開始し、これ以降、本格的に整備が進んだが、大館城の内堀と土塁の一部が残る公園は、四季折々の風景を楽しめる市民の憩いの場となっている。



本丸に近い武道館隣の坂道(通称：穴門の坂)



昭和23年の航空写真



平成28年の航空写真

大館城跡周辺の航空写真
(上は昭和23年、下は平成28年撮影)

③今に残る城下町の道と地名

城下町の構成は、大館城の本丸を中心として、その周囲に内町^{うちまち}とも呼ばれる侍町が配置され、さらにその外側には、外町^{とまち}とも呼ばれる町人町が配置された。

また、神社やお寺も城下町を構成する大事な要素として配置されている。

58 頁の城下絵図と現在の地図を重ね合わせた城下復元図を見ると、特徴的な地形や城下町特有の鉤型の道、配置された寺社の位置、侍町や町人町の名前などが地名として今も残っていることがわかる。

○今も残る城下町の「道」

本丸周辺には城下町特有の細い道、鉤型の道が随所に残っており、特に本丸の東側、大館八幡神社に向かう方面には昔のままの道が数多く残っている。

また、特徴的な崖状の地形に残る3カ所の坂道(58 頁の城下町復元図に示している、A三ノ丸の坂^{あなもん}、B穴門の坂^{かねさか}、C金坂)は、本丸や侍屋敷のある台地の上の町と、足軽や百姓が住まいする下の町を結んでいた道である。

今でも台地の上に「上町」^{うわ}、台地の下に「下町」^{した}の通称があり、この道は生活道路として使われている。上町・金坂町・新金坂町周辺の道や、金坂から大館八幡神社に向かう道^{あかだて}、部垂町^{へだれ}、桜町などの道も絵図の頃からの道である。

○侍町の地名

侍町には、秋田藩から派遣された侍と、大館城代の家中が、それぞれの別の町内に配置され居住したという。特徴的なのは常陸から移ってきた佐竹氏由来の家臣団が居住した町内で、「部垂町」は、常陸大宮市に所在した部垂城の家臣たちが、主を失って小場家の寄騎^{よりき}となり大館城下に居住した所である。部垂衆と呼ばれ、町内にかつての君主を祀った部垂八幡神社を建立した。

また、「長倉町」^{ながくら}は、常陸大宮市に長倉城を築いた長倉義興^{よしおき}の家臣たちが長倉衆と呼ばれ、大館城下に居住した所である。長倉義尚^{よしなお}の二男、上平義景^{うわだいらよしかげ}家が常陸時代から祀っていた御神像が、現在の大館神明社の御神体として合祀されたと伝えられている。

「赤館町」も赤館衆と呼ばれた赤館城の家臣たちが、小場家寄騎となり居住した所である。このほかに、「三ノ丸」、「向町」、「谷地町」、「桜町」、「金坂」、「片町」などが侍町の地名として現在も残っている。

○町人町の地名

町人町は、商人や職人、百姓屋敷を配置したところである。中でも「大町」は、町割りを行う際に、百姓を移転させ、多くの商人たちが居住する町として誕生した。このあたりには、商人が店舗を構え、「市」が頻繁に開かれるようになり、上方や中国地方からの商人も出店して大

いに賑わうようになる。やがて、「中町」^{ぼくろ}、「馬喰町」^{ぼくろ}、「新町」^{ぼくろ}を合わせた外町4町は商業活動の中心地として繁栄し、県内でも有数の商業地へと発展してきたのである。

また、外町4町は、現大館神明社を氏子として当初から支えてきた町内で、大豊講^{たいほう}(大町)、中和講^{ちゅうわ}(中町)、馬龍講^{ばりゅう}(馬喰町)、新連講^{しんれん}(新町)の奉納講は、古くから続いている。「田町」、「川原町」、「古川町」などは百姓屋敷が配置された町内で、これら町人町の多くは、地名として今も残っている。

○城下町時代からの寺社

城下町の東に配置されている「大館八幡神社」(重要文化財)は、大館城内に祀っていたものを貞享4年(1687)現在地に遷したものである。西には産土^{うぶすな}を祀る神社として「大館神明社」が配置された。

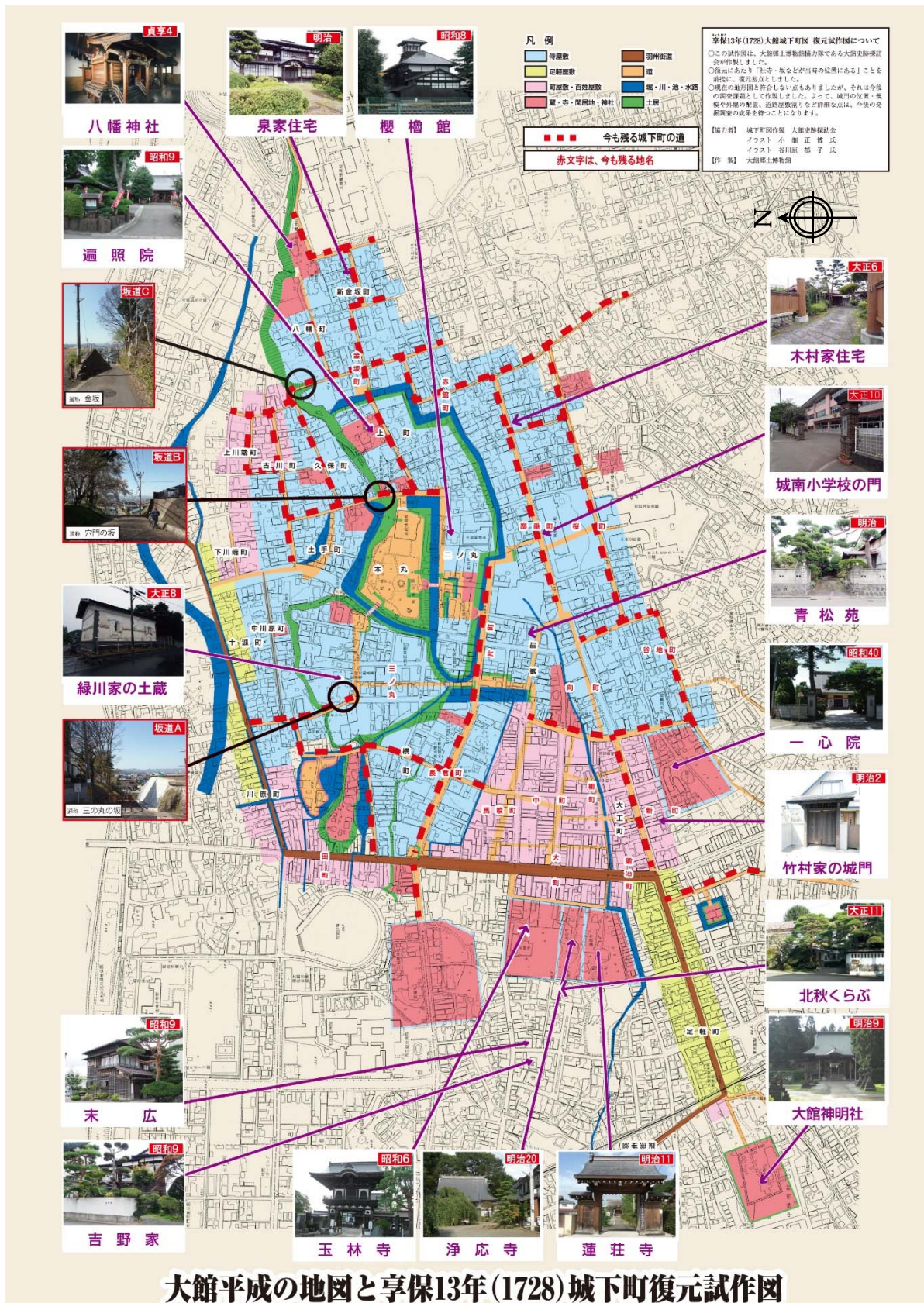
「愛宕神社」^{あたご}、「部垂八幡神社」^{へだれ}、「一心院」^{いっしんいん}、「遍照院」^{へんじょういん}、「宗福寺」^{そうふくじ}、「蓮荘寺」^{れんしょうじ}などは、大館佐竹氏に由来する寺社で、侍町に配置された家臣団同様に常陸との縁が深い。浅利の時代から続く大館最古の寺院である「玉林寺」^{ぎょくりんじ}、大館城開城^{じょうおうじ}に由来する「浄応寺」も城下町に組み入れられている。これらの寺社は、当時と同じ配置にあり、城下町の痕跡を色濃く残している。



大館八幡神社(貞享4年)



遍照院(昭和9年再建)



大館平成の地図と享保13年(1728)城下町復元試作図

城下復元図 この城下町復元試作図は、享保13年(1728)の城下絵図と現在の地図を重ね合わせたもので、小場義成が大館城の城代となって最初に着手した町割りから400年を経た平成22年(2010)に作成されたものに今も残る建造物や地名などを表示したものである。

(2) 大館神明社例祭

大館神明社の例祭は、大町通りを中心に毎年9月10日(宵祭り)、11日(本祭り)の二日間にわたって執り行われる本市の代表的な秋祭りである。

例祭は、古くから続く大館神明社の御神輿巡行と、露店ひしめく通りを重さ1トンを超える各講自慢の山車を曳き、その勇壮さを競い合うのが特徴であり、山車の上で披露される「大館囃子」が各講に共通した伝統芸能として継承されている。

大館神明社は、かつて小場義成が行った城下町割りの西端に位置し、参道からまっすぐ東に続く羽州街道は、祭りの中心となる大町通りから北方向に折れ、津軽方向へと続く。

①大館神明社の起源

旧記によると、もともとは小館花道上にある古神明社がふるしんめいしや大館・こだてほな うぶすな小館花の産土神であったとされている。佐竹義宣が秋田藩主となって70年余り後の延宝3年(1675)に大館神明社は現在地に移され(大館戊辰戦史付沿革史)、この際に佐竹氏を先祖に持つ長倉義尚の二男上平義景家が、常陸時代から祀っていた御神像を神明社御神体として奉鎮座したとある。この時に古神明社の祭神と合祀して始まったのが、現大館神明社の起源と考えられている。



大館神明社(明治9年再建)



御神輿(明治7年建造)

大館神明社は、その後に何度か再建されたが、明治3年(1870)9月の大火で(御神輿とともに)類焼し、現在の社殿が完成したのは明治9年(1876)秋のことであった。再建事業録(明治38年(1905))によれば、全郷から四千円余の献納金を得て明治8年(1875)に工事を起こし、翌年秋に完工をみたとある。当時の米価は一石(150kg)三円五十銭ほどなので、四千円がいかに大きな額かがわかる。なお、現行の御神輿は、明治5年(1872)から3年間、全氏子が毎月五厘ずつ奉納して明治7年(1874)に建造したものである。

②御神輿巡行区域内に残る建造物

大館神明社の御神輿は、最初の氏子町内であった外町4町から始まり、広い氏子町内の会所をくまなく巡行する。この区域内には、合祀した御神体に由来する古神明社、かつて賑わった新開地に残る料亭などがある。また、大館駅前には昭和30年代の映画館や近代和風の建造物が残っており、近現代大館の足跡を垣間見ることができる。



古神明社(昭和16年再建)

以前の社殿が昭和15年(1940)に焼失し、その翌年7月末に再建された。石造の鳥居は明治41年(1908)に建立されたものである。



北秋くらぶ(大正11年)

かつて賑わった新開地に残る料亭。建物の一部は大正11年(1922)に再建されたものである。



割烹末広(昭和9年)

かつて賑わった新開地に残る料亭。火災に遭い、昭和9年(1934)に再建された。



料亭吉野家(昭和9年)

かつて賑わった新開地に残る料亭。火災に遭い、昭和9年(1934)に再建された。



緑川家住宅(昭和 33 年)

製材業や金融など、多くの分野で活躍した緑川大二郎氏の邸宅。駅前に残る近代和風の建造物。



映画館オナリ座(昭和 30 年)

洋画専門の映画館として大館駅前にオープンし、一世を風靡したが平成 16 年(2004)に閉館。平成 26 年(2014)に再開して現在に至る。



木村家住宅(大正 6 年)

台湾などで活躍した木村泰治氏が建造した住宅。後年、母屋は暮らしやすいように改造されているが、離れは、昔のまま保存されている。



城南小学校の門(大正 10 年)

元は大正 2 年(1913)に開設した、「町立大館実科高等女学校」の門で、大正 12 年(1923)には大館高等女学校に昇格し、大館桂高校の前身となった。



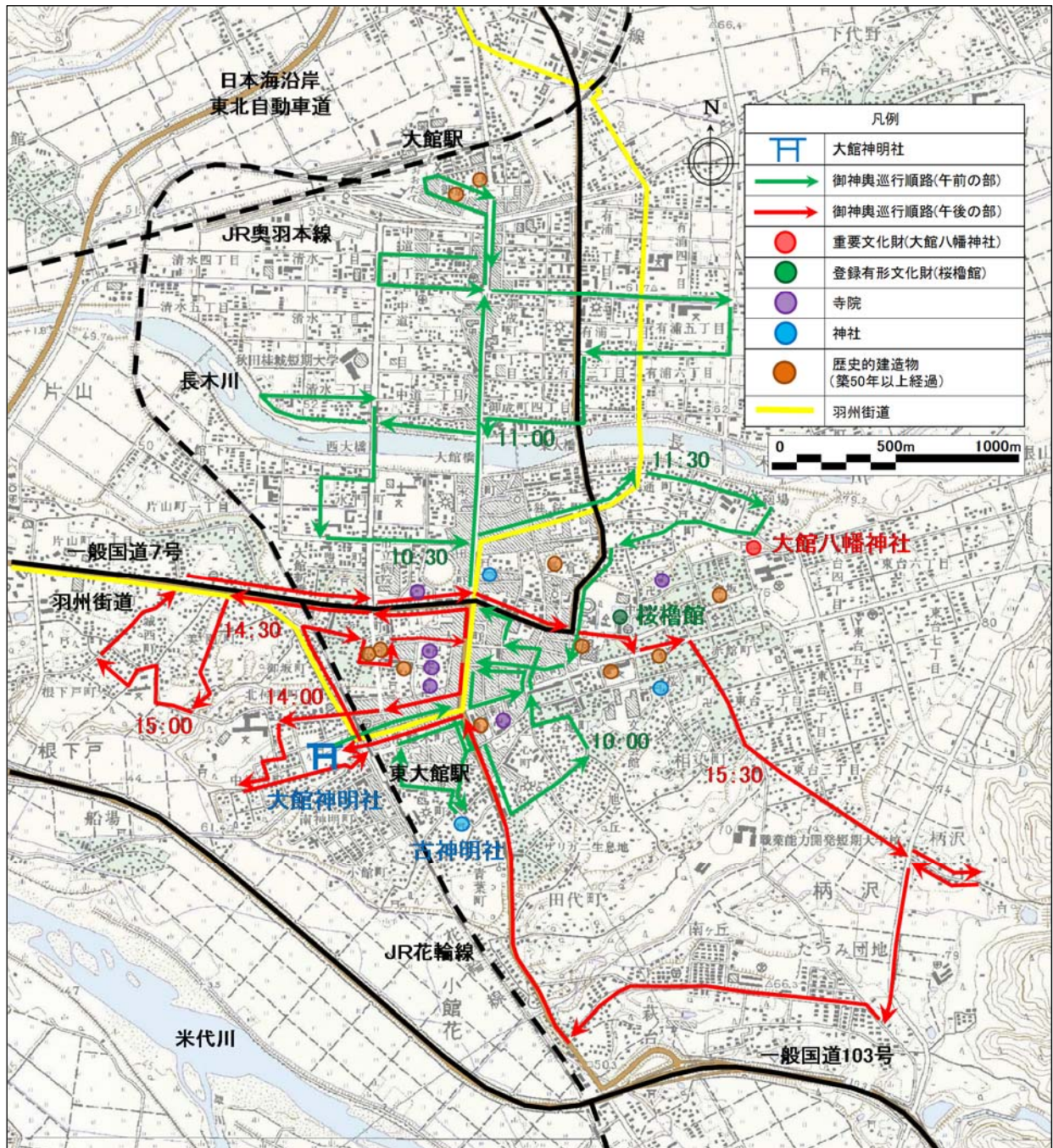
竹村家に残る城門(明治 2 年)

明治 2 年(1869)藩主の代理で佐竹義脩公が大館を巡視することになり、城跡に急ぎよ作った四つの門の一つである。後に竹村家が引き取り、一つだけ残っている。



佐竹西家累代の墓地(宗福寺境内)

宗福寺には、大館佐竹氏初代から第 23 代までが眠る墓がある。



御神輿巡行順路と町割りに残る建造物 (地図：出典国土地理院)

③大館神明社例祭の歴史

大館神明社が現在地に建立された当時の例祭は、旧暦7月末日から3日間であったと伝えられるが、明治3年(1870)の火災でそれ以前の記録が失われ、現在残っているのは、明治7年(1874)に御神輿が建造されて以降の記録のみである。その後の例祭は、明治42年(1909)に新暦9月14・15日に変わり、さらに翌年から明治天皇の御巡幸を記念して9月10・11日の開催となり、以降現在まで続いている。

明治期には、御神輿を先頭に背の高い鉾や飾山が続く長い行列が運行されてきたが、電柱や道路事情の変化により、運行が困難な時代を迎える。明治30年(1897)の記録に「大豊講の山車は田豊講へ行く途中、坂中にて電信へ横たわり」とあり、この頃から背の高い山車の運行には支障が出ていた(以下神輿は、大館神明社のものを「御神輿」、奉納講のものを「みこし」と表記)。



戦後の一時期、曳き手が足りず山車をトラックに載せて巡行した時代もあった(大豊講)

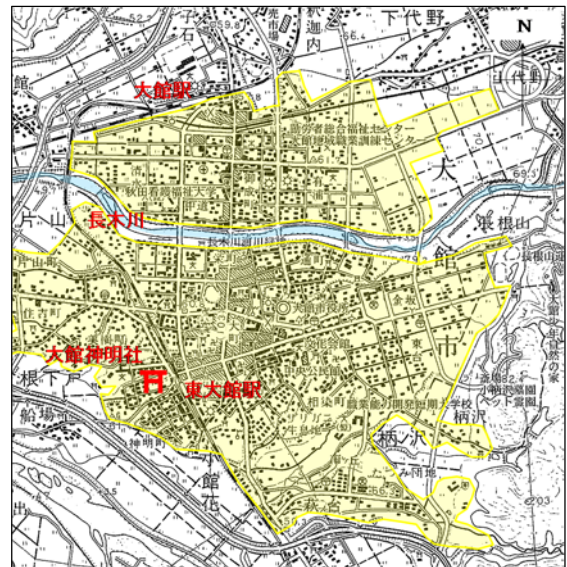
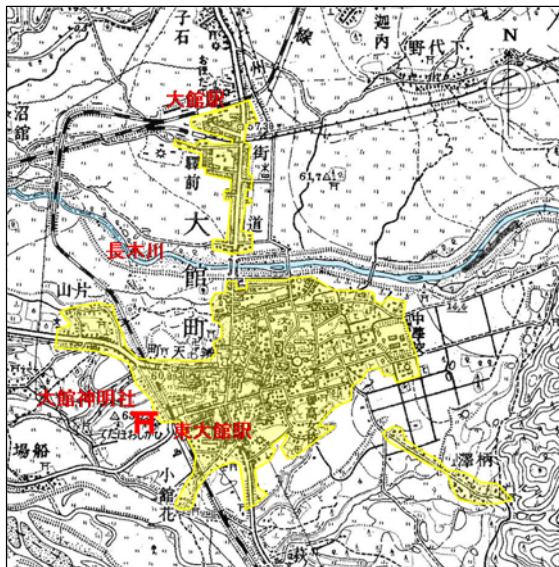
戦後になると氏子区域が広がり、奉納講の山車・みこしが増えたため、御神輿の巡行が渋滞を引き起こすようになった。また、大館神明社境内に奉納講全部を集めて神事を行うことが難しくなったため、昭和44年(1969)からは、奉納行事の奉告祭を別に開催するようになり、これ以降大館神明社の御神輿巡行と奉納山車・みこしの運行は別々に行われるようになった。

④氏子区域の広がりとお神輿巡行

旧藩時代から大館神明社の例祭は、外町4町と呼ばれる大町、馬喰町、中町、新町が年番制で取り仕切ってきた。これは、城下町に配置された町人町のうち大町を中心とした外町4町に資産家や大きな商人がたくさんいたということの表れである。商人たちの活動が活発になるとともに町が広がり、大館神明社の氏子区域も広がっていったのである。

明治後半からは、城下町の大半と長木川以南までが氏子区域に入り、その区域を御神輿や奉納山車が練り歩くようになるが、それでも氏子の主体は外町4町であった。大正7年(1918)の神社経費を見ると、総額六百五十八円三十六銭のうち85%を超える五百六十円二十七銭を外町4町で負担している。残りの15%を後に氏子として加わった11町内が負担していることから、外町4町の経済力が圧倒的に高かったことがわかる。

次頁の昭和22年(1947)の地図を見ると、長木川以南では城下町の範囲で町が形成されているが、長木川以北では駅前に向かう道路沿いのみで町が形成されていることが分かる。しかし、現在の長木川以南は住宅地がほとんどを占めるようになり、また長木川以北では農地が住宅地へと変化していることが確認できる。



町の広がり(左：昭和 22 年、右：現在) (地図：出典国土地理院)

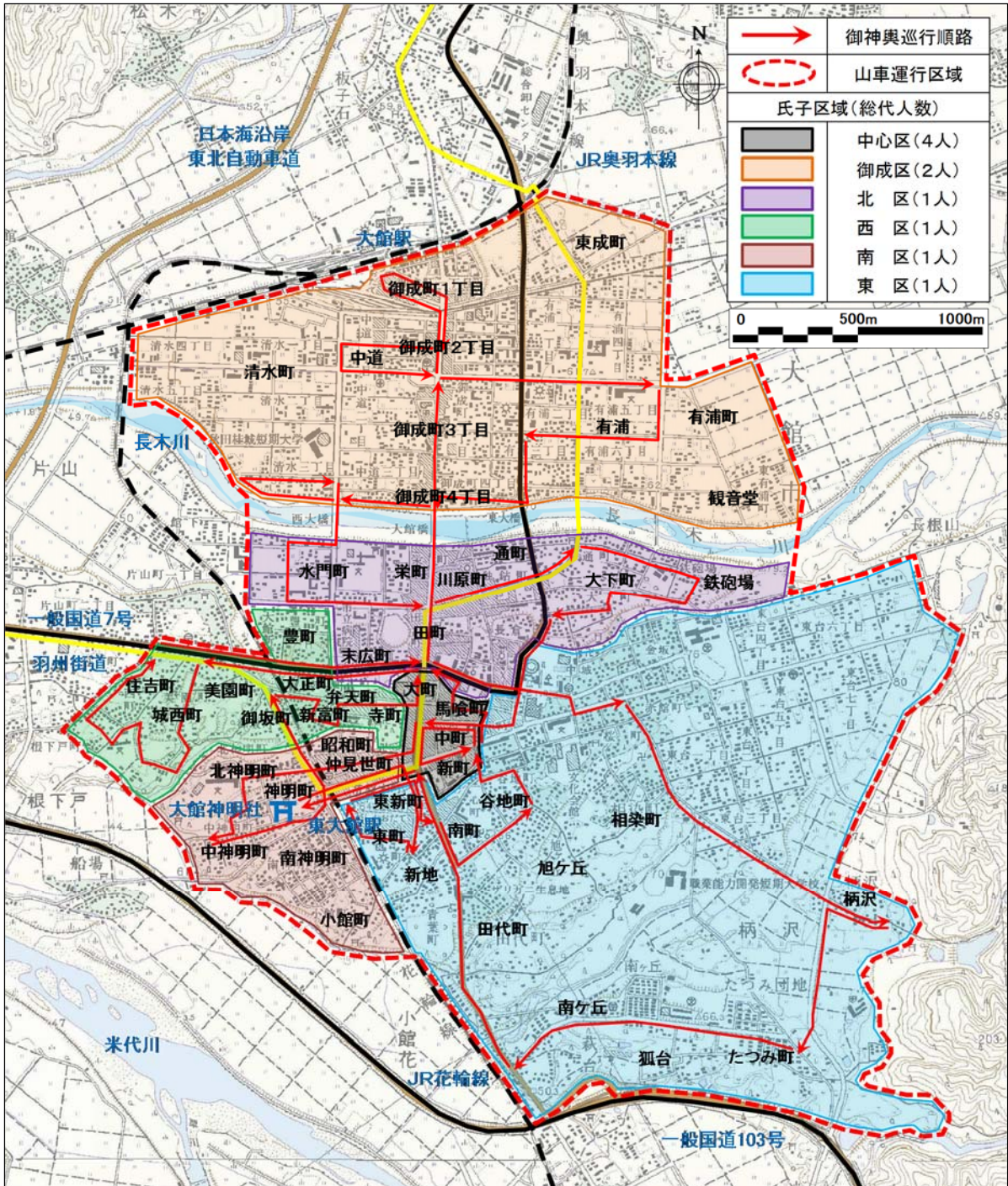
大館神明社の氏子町内もまた住宅地の拡大とともに広がりを見せ、昭和 55 年(1980)の御神輿は、栄町、御成町、中道、清水町、水門町、有浦、相染、たつみ町、南ヶ丘なども回るようになる。その後もいくつかの新興住宅街が氏子区域に加わり、御成区、北区、西区、南区、東区など(44 町内)が現在の氏子区域になっている。外町 4 町から始まった大館神明社の例祭は、今では市街地のほとんどを氏子区域とするほど規模が拡大したが、今でも氏子の中心は外町 4 町である。そして御神輿巡行では、外町 4 町が年番で担当する御旅所(お昼の休憩所)や、御神体由来の古神明社と長倉町で執り行う神事が、昔と変わらない形で続けられている。

大館神明社氏子会の構成

(神明社)	宮司	(氏子会)	会長	1名	
	禰宜		副会長	2名	
			常任総代	10名	6ブロックの代表
			監事	3名	
			総代	(各町内の代表者)	

(氏子区域)	常任総代数	区域町内
①中心区	4	大町、新町、馬喰町、中町
②御成区	2	1丁目(1区~4区)~5丁目、清水町、中道町、有浦町、東成町
③北区	1	栄町、田町、末広町、川原町、通町、大下町、鉄砲場、水門町
④西区	1	弁天町、新富町、大正町、御坂町、住吉町、豊町、美園町
⑤南区	1	神明町、南神明町、中神明町、北神明町、仲見世町、昭和町
⑥東区	1	東新町、東町、新地、南町、田代町、柄沢、相染町

※①がももとの氏子区域で、②~⑥はのちに広がった区域である。

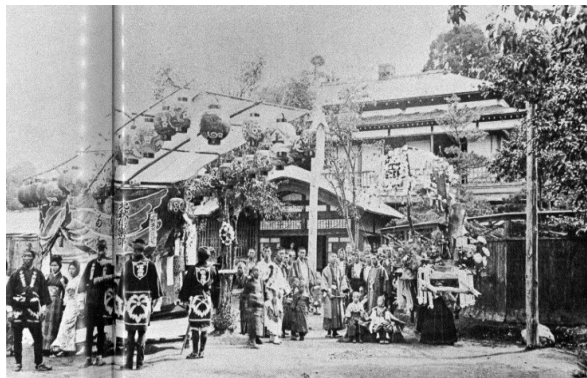


大館神社氏子の区域及び山車運行区域 (地図：出典国土地理院)

⑤山車・みこしを奉納する人々

かつての行列は、氏子が担ぐ大館神明社御神輿の後を外町4町内講中の山車、資産家の飾り山車と囃子山車などが続く賑々しいものであった。大豊講、中和講、馬龍講、新連講の4講は明治の頃から今も続く奉納講である。

その後、物資の乏しかった終戦後や度重なる火災を乗り越え、市街地の復興とともに大館神明社の例祭は続けられてきた。京都祇園山鉾のような背の高い姿を起源に持つ大館の山車は、都市化と道路事情に合わせる形で少しずつ変化してきた。現在の姿に定着したきっかけは、昭和50年(1975)に大豊講が建造した唐破風を四面に持つ神楽殿を模した曳き山車(人力)で、これ以降同じような形態の山車が次々に建造され、現在も運行している。昭和55年(1980)に運行された山車は14台、みこしは22台と記録されている(平成28年(2016)は山車14台、みこし8台)。この頃から、大館神明社例祭の神髓を損なうことなく、増えた奉納講が一体となった祭りを運営するために、氏子組織、奉納講が一体となった「実行委員会」を組織し、大館神明社境内に事務所を整え、一年を通じて取り組んでいる。



北秋倶楽部主人、石川重吉が奉納した余興山車
(大正時代)



馬龍講に集まった若衆(昭和2年)

⑥大館囃子(市指定無形民俗文化財)

大館囃子は、大館神明社例祭に奉納する山車の上で演奏されるお囃子として、長く親しまれてきた。

お囃子の音や調子を表現した古い記録は残っていないが、小野儀助日記には明治22年(1889)の例祭に「はやし」が奉納されたことが記されていることから、この頃には毎年恒例のお囃子が存在していたと考えられている。



大館ばやし保存会

また、明治 31 年(1898)に馬龍講が運行した背の高い山車の姿は、鉦を依り代とする京都祇園山鉦と近似性が高く、さらに大館囃子の曲調が花輪ばやし(重要無形民俗文化財)と近似性が高いことなどから、大館囃子は、「京都の祇園囃子」の系統と考えられている。

昭和 38 年(1963)に結成された大館ばやし保存会は、大館囃子をふるさと大館の民俗芸能として後世に伝えることを目的に活動を続け、「大館囃子」は平成 13 年(2001)に市の無形民俗文化財に指定されている。

例祭本番に向けての稽古は、修得が一番難しい笛が 5 月後半頃に、やや遅れて 7 月頃には太鼓や鉦かね、踊りが始まる。

8 月になると、囃子手たちの人数がそろい調子も上がり、お盆を過ぎると市内のあちらこちらから各講が奏でる大館囃子の音色が聞こえてくるようになる。保存会は、各講に大館囃子を正しく伝え、囃子手や踊り手を養成する役目も担っているのである。



明治 31 年馬龍講の山車
(大館市史)

大館ばやし保存会の構成

会長	1名	(笛)	師範	4名
			師範代	4名
副会長	3名	(太鼓)	師範	1名
			師範代	10名
監事	2名	(三味線)	師範	1名
			師範代	1名
		(鉦)	師範	1名
			師範代	1名
		(踊)	師範	1名

⑦余興奉納奉告祭(9月10日)

宵祭り神事の前には、余興奉納奉告祭の神事が馬喰町会場で行われる。

まずは大館神明社で遷御の儀を執り行い、神様を載せた御神輿が奉告祭の会場に向かう。会場に到着した御神輿の前に神主一行、例祭余興奉納実行委員会、奉納各講の関係者がそろって神事を執り行う。神事が終わると、各講にお神酒と御幣を授け、お祓いを受けた山車とみこしの正面右側に御幣を奉って、それぞれの区域へ運行を開始する。



奉告祭に集結する山車

奉告祭が行われる馬喰町の路地には、奉納講の山車やみこしが集結して御神輿の到着を待つ。



奉告祭の神事

大館神明社から到着した御神輿を前に、神主一行、山車・みこしを奉納する各講の関係者がそろって神事を行う。



稚児行列も参加

大館神明社でお祓いを受けたかわいい子供たちが、会場まで行列を作って参加する。



各講に御幣を授ける

神事を終わると、神様の依り代として、奉納各講に御幣を授ける。



各講の山車とみこしをお祓い

奉告祭に参加した全部の講の山車・みこしがお祓いを受ける。



依り代を山車に設置する

神事を終わると、各講の山車・みこしの正面右側に依り代の御幣を設置する。これで準備万端。



いよいよ出発

市内各地を練り歩く各講の山車・みこしが準備を整えて、それぞれ出発する。

⑧宵祭り(9月10日)

夕方になると大館神明社に氏子関係者、例祭余興奉納実行委員会、参加各講の代表が集合し、宵祭りの神事を執り行う。修祓しゅぼつに続いてご本殿の扉を開き供物を捧げ、斎主のりとが祝詞を奏上し、神楽を奉奏。氏子関係者が玉串を奉り、宵祭りの神事を終える。



しゅぼつ
修祓の儀

拝殿に向かう前に、清めの儀式を行う。



さんしん
参進の儀

神職を先導に祭主や関係者が、神事を行うため拝殿に向かう。



宵祭りの神事が始まる

本殿の扉が開き、厳かに宵祭りの神事が始まる。



けんせん
献饌の儀

御神前に供物を捧げる儀式を行う。



神楽を奉奏

巫女が浦安の舞を奉納する。



ほうてん
玉串奉奠

神官、氏子関係者、例祭余興奉納実行委員、各講代表などが玉串を奉奠する。



出陣式(奉納行事)

田乃坂越えを前に、各講の山車がそろい踏みで出陣式を行う。



田の坂越え(奉納行事)

大町会場の前に立ちはだかる上り坂を重さ1トンを超える山車が地響きをあげて駆け上がる見せ場。

⑨本祭り(9月11日)

○例祭と御神輿巡行

本祭りの朝は大館神明社の例祭から始まる。修祓しゅぼつに続いて齋主が祝詞を奏上し、神楽を奉奏。関係者が玉串を奉り神事を終えると、「遷御せんぎょ」の神事を行い、御神輿巡行の準備となる。

先代の御神輿は本殿とともに焼失したため、現在の御神輿は明治7年(1874)に造られたものである。昔は氏子たちが御神輿を担ぎ、神官が馬に乗り、牛が御神輿を載せた荷車を曳いた時代もあったが、現在は巡行の範囲が広くなり自動車の運行に変わっている。

明治20年(1887)の御神輿行列の様子は「1 榊さかき、2 御神旗ごしんき、3 かんこう鉾ほこ、4 猿田彦命さるたひこのみこと、5 御供おとも、6 祠掌ししょう、7 神官しんかん、8 御神輿おみこし、9 御神馬ごしんめ、10 唐櫃からひつ、その後ろに飾山が続く」となっていたが、現在は、1 先導車(先触れ)、2 指揮車(神官)、3 神輿車(御神輿、宮司、猿田彦)、4 供奉車ぐぶ(氏子総代)、5 初穂車という車列に変わっている。

古くからの習わしで古神明社と御神体所縁の長倉町(現在のグランドパークホテル)では神事を行い、外町4町(大町、中町、馬喰町、新町)の当番町が用意した御旅所がお昼の休憩所となる。御神輿巡行の車列は、大館城下のお寺や古くからの料亭街を通り、駅前方面や有浦・東台などの新興住宅地まで、広い氏子区域を隈なく回り、午後4時頃には大館神明社に帰還する。最後に「還御」の神事を執り行い、大館神明社例祭の日程を終える。



例祭の神事

関係者がお祓いを受け、例祭の神事が執り行われる。



遷御せんぎょの儀

御神輿の巡行を前に、神様にお遷りいただく儀式が行われる。



御神輿巡行が出発

大館神明社から5台の車列で御神輿の巡行がスタートする。



古神明社での神事

現在の大館神明社に古神明社の祭神が合祀されていることから、毎年神事が行われている。



長倉での神事

現在の大館神明社に合祀されている上平家(佐竹氏縁)の御神体にちなみ、毎年神事が行われる。



御旅所に神様を遷す

当番町が準備した御旅所に、御神輿の神様をお遷しする。



各講の会所を巡行する御神輿

御神輿は、丸一日かかって氏子区域各講の会所を巡行する。写真は新連講(新町)の会所の様子。



料亭街を通る御神輿

大正時代に建てられた建物が残る料亭街を通る御神輿。左奥は、割烹末広(昭和9年)。



御神輿に頭を下げる

奉納各講は、御神輿が通りかかると演奏や踊りを止め、被り物を取って頭を下げて見送る。



各講の山車が参拝

奉告祭の神事とは別に、各講の山車やみこしは、それぞれ大館神明社に参拝し、お祓いを受ける。



かんぎよ
還御の儀

氏子町内の巡行を終えて大館神明社に戻ると、御神輿から神様にお戻りいただく還御の儀式が行われる。



奉納講の大館囃子(奉納行事)

それぞれ運行する奉納講の山車では、大館囃子が演奏される。写真は南神講。



大館駅前の各講共演(奉納行事)

長木川以北の各講が大館駅前に集結し、大館囃子の共演を繰り広げる。



祭典祝い水(奉納行事)

祭りの終わりを惜しみ、締め込み姿の熱い祭り人達が周囲から盛大に祝い水を受ける。

(3) 大館アメッコ市



冬の大館に咲く枝アメの花

お正月が過ぎると、市内のあちらこちらで「枝アメ」が飾られ、冬の大館に華やかな風景が出現する。ミズキの枝に色とりどりの飴や短冊を飾る「枝アメ」は、雪の白や青空に映えて街路樹が花を咲かせたかのようなようである。

現在の大館アメッコ市は、毎年2月の第2土曜日とその翌日に、大町通りで開催されている。車両を通行止めにした大町通りには、特設の鳥居と拝殿が設置され、約100店のアメ屋などの露店が軒を連ねる。アメッコ市の飴を食べると風邪をひかないと言われており、縁起の良い飴を買い求めるお客様が県内外からたくさん訪れ、大町通りを埋め尽くす。



会場に作られた鳥居と拝殿



縁起の良い絡みアメをどうぞ

①大館アメッコ市の起源と「市」

大館アメッコ市は、400年以上前の天正年間(1573～1591)、大館城下に開かれた「市」で始まったと言われている。この頃は、いくつかの勢力が拮抗し、大館城の支配をめぐって激しく争っていた時代である。

のちに大館城下は佐竹西家の支配となり、城代が管理する「市」が各地に開かれるようになり、開催日や売買商品の制限なども決められた。城下町が形成されると、大町を含む外町4町が商業地域として賑わうようになる。

大館市史によると、明治初期から明治30年代まで大館地方で開かれる市は、7の日が大館、6の日が十二所、2の日が川口、5と10の日が扇田、4の日が早口と決められていた。このうち大館町の市は、大町、馬喰町、中町、新町の四つの市が、月の7・17・27の日に順繰りに開かれ、大町の市は、小野家(当時の主人は小野儀助^{ぎすけ})の前通りで開かれていた。

こうした市で売られていた初めの頃の飴は、農家が米などで作ったものと考えられている。昔のアメの製法(むつ市史・食の事典参照)を紐解くと、もち米や大麦もやしを用い、乾燥や発酵を経て水飴状にする。お菓子というよりも、甘味料や薬のような使い方をしたようである。

明治期の小野儀助日記には「あめ町」が登場し、これが最も古いアメッコ市の記録である。

昭和の初め頃になると、お菓子屋さん^{お菓子屋さん}が商売として飴を作るようになり、寺町の小路で「市」として開かれるようになり、これが現在の大館アメッコ市につながるものと考えられている。

昭和14年(1939)発行の浅野泰助^{たいすけ}著「秋田奇聞抄」には、「明治に入ると中央から製菓技術を教える渡り職人がみられ、飴の加工技術が一段と進歩した。着色、動物や果物の型づくりなどが多くなり、女、子供達の購買意欲を駆り立てた」とあり、その頃は周辺の農家や季節営業、兼業、副業の飴売り業者が主流を占めていた。これらのことから、少なくとも明治期に開かれていた「市」にはアメが売られていて、昭和の初め頃から現在のような「アメッコ市」が開かれるようになったと考えられる。

言い伝えには、(アメッコ市の)「飴を食べないと蛆^{うじ}になる」とあるが、この意味は定かではない。今は開かれなくなってしまったが、昔は岩手県の浄法寺^{じょうぼうじ}や住田町^{すみた}などでも「飴っこ市」が開かれており、その地方にも「この日飴を食べないと蛆になる」という言い伝えがある。



花が咲いたような枝アメ



秋田犬のパレードも行われる



たくさんの枝アメが並ぶ(昭和40年代)

②アメッコ市のシンボル「枝アメ」

大館菓業百年祭記念誌(昭和60年(1985))によると、枝アメは、餅を細い木の枝に付けて神棚などに供える「餅花」をヒントにして作られたもので、昭和20年代半ばに登場したといわれる。

地元紙「北鹿新聞」^{ほくろく}には、昭和20年代からアメッコ市の記事や広告が掲載されており、昭和26年(1951)頃から「飴の木」「芝の枝に赤い飴」「南天の赤い実」という表現が登場する。これが現在の枝アメにつながっているものと考えられる。枝アメは、この頃からアメッコ市の人気商品で、大人も子供も枝に付いたアメを手にとり下げて歩いていたようである。当時は木の種類にも決まりはなく、飾りつけもシンプルであったが、昭和50年代に入るとミズキの枝を使った枝アメが定着し、市内のあちこちに飾りつけられた枝アメはアメッコ市のシンボルに定着したのである。

③アメッコ市に関連する建造物

現在アメッコ市の主会場となっている大町通りは、羽州街道の一部であり、大館城下の外町4町に位置する。羽州街道の裏通りには蓮荘寺・浄応寺・玉林寺が並び寺道通り^{てらみち}と呼ばれていた。この場所には古くから小さな市が立ち並び、この中でアメッコ市が続けられてきたと考えられる。三つの寺は現在も同じ場所にあり、この通りは現在寺町通り^{てらまち}と呼ばれている。



蓮荘寺(寺町通り)

小場義成が大館城代となった後に常陸太田から移転。戊辰戦争で焼失し、明治11年(1878)の再建である。



浄応寺(寺町通り)

浅利残党を説得し、小場義成を無血入城させた功によりこの地を与えられた。明治20年(1887)頃の再建である。



玉林寺(寺町通り)

大館地方の領主、浅利則頼が鳳凰山の麓に創建と伝えられる。十狐城下に移転後、現在地に移ったが、火災で類焼し、昭和6年(1931)に造営。



昭和37年当時のアメッコ市(寺道通り)

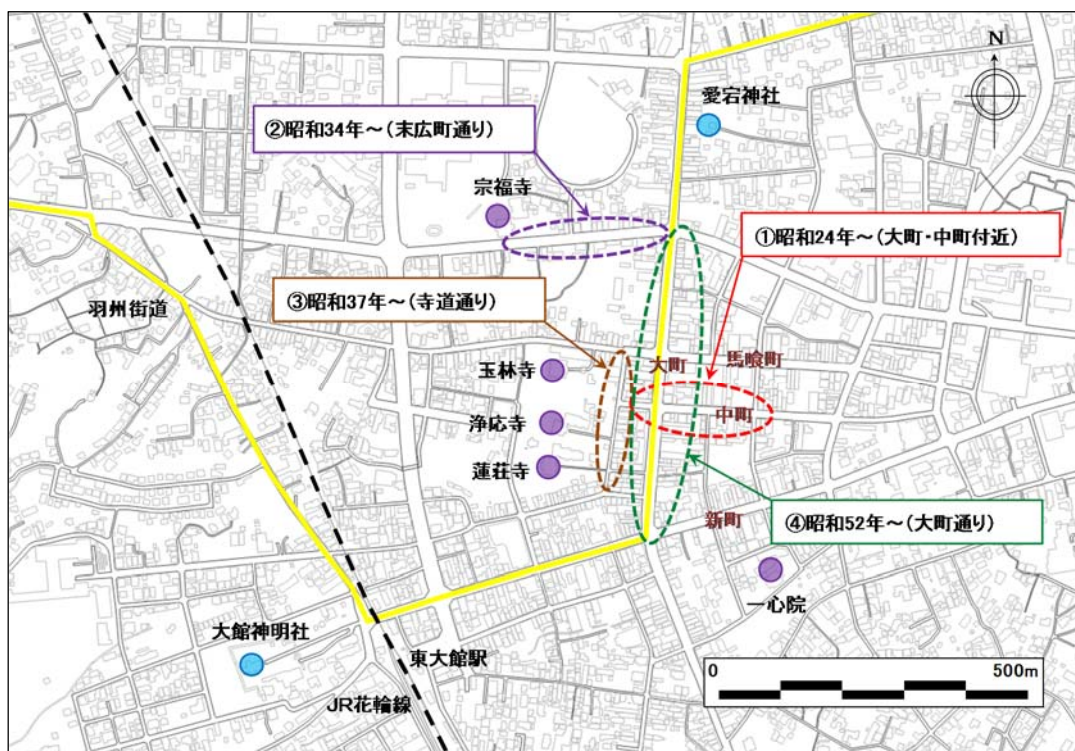
蓮荘寺、浄応寺、玉林寺が並ぶ寺道通りでは、昭和37年(1962)から昭和51年(1976)頃までアメッコ市が開かれた。

④アメッコ市の変遷

地元紙の記録によると、アメッコ市の開催場所は、昭和24年(1949)からは大町・中町付近、昭和34年(1959)からは宗福寺に続く末広町の通り、昭和37年(1962)から昭和51年(1976)頃までは蓮荘寺・浄応寺・玉林寺が並ぶ寺道通り、昭和52年(1977)からは再び大町通りで開催されてきた。特にお寺の界隈には、古い時代から小さな市が開かれてきたので、後の時代になってもアメッコ市の場所として定着するようになったのであろう。

戦後の物資が乏しい時代に、アメは高い買い物であったが、地元紙の記事は人々がこぞってアメッコ市のアメを買い求める様子を伝えている。だんだんと干支や果物、動物を模ったアメ、芸術品のようなアメなども登場するが、やがていつでもどこでもアメが手に入るようになると、アメッコ市は低迷の時代を迎える。

大きな変化を迎えたのは昭和57年(1982)に大町通りを歩行者天国にして開催するようになったことで、全国各地から観光客が訪れる大規模なイベントになった。いつしか「飴を食べないと蛆になる」という言い伝えは、「飴を食べると風邪をひかない」に変わり、今でも大館アメッコ市には、たくさんの人々が訪れる。



アメッコ市の開催場所の変遷 (地図：出典国土地理院)

(4) まとめ

大館の中心部には、かつて大館佐竹氏の町割りによりつくられた城下町があった。

大館神明社の例祭は、収穫を終えて周辺の農村集落から人々が城下町に集まり、町を形成・発展してきたことを背景にもち、地域の一体性を強める秋祭りとして続けられてきた。同時に外町4町の商人たちにとって例祭は、町に周囲からたくさんの人々を呼び集めることができる大切な事業であった。そのため商人たちは氏子として大館神明社を守り、例祭を率先して盛り上げてきたのである。

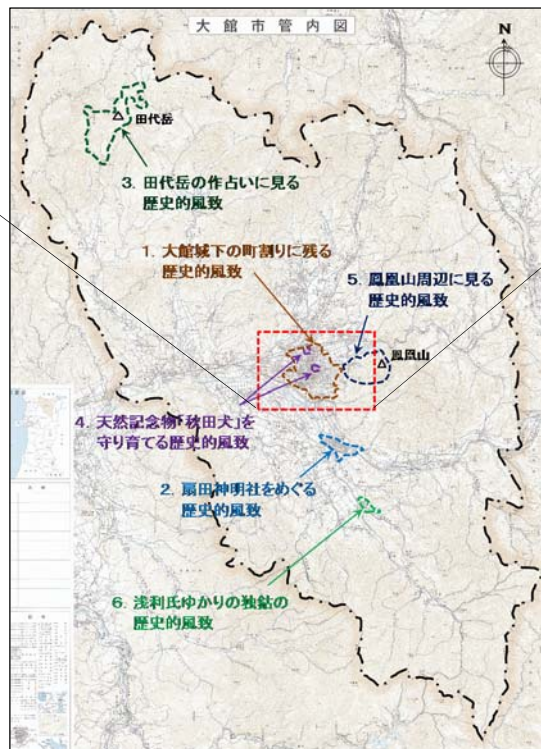
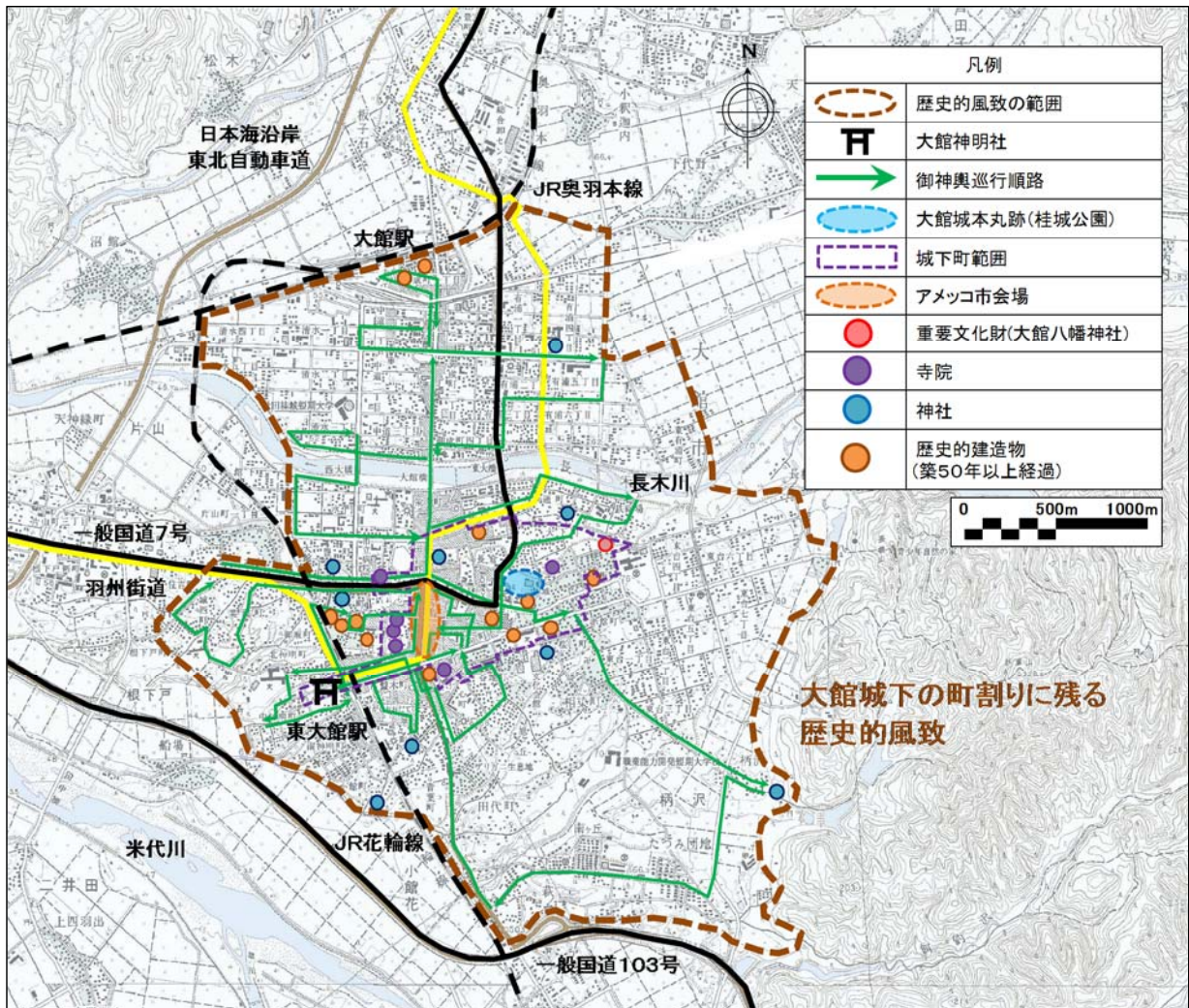
その後、大館は度重なる火災に遭いながら、何度も復興を重ねて、まちづくりの歩みを進めてきた。大館神明社の例祭は、先人たちが積み重ねてきた歴史や情熱を込めて次世代へと伝えられ、毎年「祭り」の賑わいを高める努力が続けられている。

大館佐竹氏の城下町を舞台に始まった祭りは、かつて賑わった新開地^{しんかいち}の料亭や大館駅前の映画館など、近現代の建造物が残る地域まで御神輿や曳山車が運行するようになり、広い市街地で例祭の行事が繰り広げられるようになった。

今もお盆過ぎになると、市内のあちらこちらから大館囃子の音色が聞こえ始め、お祭りには自分の所属する奉納講の山車を曳くために帰郷する人々がいる。

大館アメッコ市もまた、城下町の小道に人々が品物を持ち寄って開いた小さな市に生まれ、冬の大館に鮮やかな飴の花を咲かせる冬祭りへとつないできた文化である。今も市の周辺には、蓮荘寺・浄応寺・玉林寺が並び、市と一体となり風情を醸^{かも}し出している。今は大通りが会場となり、規模が大きくなったアメッコ市は、ふるさと大館の代表的な冬祭りである。

小さな市から始まった商業文化の源流は、やがて城下町にたくさんの人々が集まる町を形成し、現在の大館市の基礎を作った。大館神明社の例祭と寺町周辺の大館アメッコ市は、多くの市民の手で受け継がれ、大館城下の市街地に良好な歴史的風致を形成している。



大館城下の町割りに残る歴史的風致の範囲 (地図：出典国土地理院)

【コラム】

○大館城の守護神から現在の大館八幡神社へ

大館八幡神社には、国の重要文化財に指定されている本殿2社(正八幡宮・若宮八幡宮)がある。初代大館城代小場義成が大館城の守護神として城内に祀っていたもので、貞享4年(1687)第4代佐竹義武が、大館城及び大館鎮守総社として、現在地に建立したものである。

明治期になると大館城代は秋田市に転出し、政府の神仏分離令により大館八幡神社もその形態を変え、内町16町内の氏子が大館八幡神社を運営してきた。大館城の守護神として祀られていた当時の神事や行事に関する資料は残されていない。

現在の大館八幡神社は、かつての氏子町内にこだわることなく多くの崇敬者の支えで運営され続けているが、かつて城主であった大館佐竹氏との交流は続いている。

写真は、平成14年(2002)に行った鳥居と参道の渡り初めである。神主に続くのは佐竹西家第24代当主の代行で出席した次期当主である。参列者は、佐竹氏の家紋と同じ扇の社紋を染め抜いたはんてんを着用し、神事が行われた。佐竹西家当主が大館八幡神社を訪れる機会が数年に一度はあるという。



大館八幡神社の渡り初め

○八幡会の「節分豆まき行事」

「大館八幡会」では、大館佐竹氏の家紋入りの陣笠と袴のいでたちで行う節分豆まき行事を恒例の年中行事として続けている。もともとは明治44年(1911)亥年生まれの有志が、大館城のお侍たちが節分に行っていたと思われる豆まきを再現しようと、昭和50年(1975)から始めたもので(お祓いをした「福豆」をまくので)掛け声は「福は内」のみである。

いつの頃からか、豆まきには戌年・猪年の厄年42歳の代表者が参加するようになり、今では生まれ年に関係なく厄年42歳の年男が大館八幡会とともに豆まきを行うようになった。

最近では300kgの落花生を用意し、「家内安全」「交通安全」「防災除」と書いた祈願札を入れて3万袋の「福豆」を作る。大館城ゆかりの大館八幡神社から、陣笠に袴姿の一行が「福豆」を届けるとあって、「福は内」の幟を持って歩く一行には、たくさんの市民が「福豆」を求めて集まる。



大館八幡神社の節分豆まき



福豆の袋詰め作業

おうぎたしんめいしゃ
2. 扇田神社をめぐる歴史的風致

扇田神社には江戸時代に佐竹宗家より拝領した御神輿があり、それを大切に守り伝え毎年7月16日の例祭を行っている。また、4月3日には江戸時代から続く火伏祭のジャジャシコが行われ、春を告げる祭として人々の生活に根付いている。

(1) 扇田の成り立ち

①地名の由来

旧扇田村は、市内中央部を西流する米代川の南岸に位置する。

江戸時代の紀行家菅江真澄は「扇に似たる稲田のあり(中略)さりければこの里を扇田の名に負へる」と言い、現在も真澄の言う場所に水路が弧を描いて流れている。現在は宅地であるが、数十年前までは扇形に田んぼが広がっており、これが扇田の名前の由来とされている。

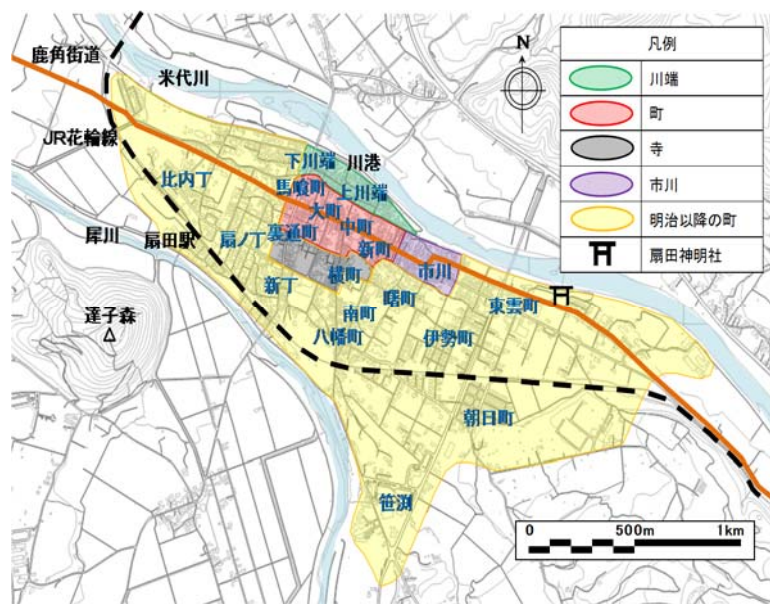
明治6年(1873)の扇田村略絵図を見ると、米代川の南に接して「川端」があり、そのまた南に「町」があって、さらに南に四つの寺が並んでいる。

川端は上川端・下川端に、町は馬喰町・大町・中町・新町・裏通町に分かれていて、町の東側に枝郷として市川があった。

現在は町の区域が広がり、全部で19町内となっている。



扇田村略絵図(明治6年)



明治以降の町の広がり(地図:出典国土地理院)

②舟運で栄えた扇田

江戸時代の物流は、大量の荷物を安全に運ぶための手段として水上輸送が主流であったため、川港は重要な拠点となった。

米代川は扇田付近まで来ると水深が浅くなるため、五十石船は扇田止まりとなり、扇田の船着場から荷揚げすることになる。そのため扇田には「市」が立ち、大いに栄えたという。藩内の村々を調べた久保田領郡邑記(享保15年(1730))には「市六斎(月6回開催)富村なり」と



現在の扇田の市日

特記されている。これは、近隣に大館城があったことのほか、大葛金山や尾去沢鉾山など多くの鉾山があったことも影響している。鉾石は、陸上輸送には適さないからである。

③藍や繭の集散地

扇田は川港であると同時に、周囲に多くの農村を抱えた農産物の集散地でもあった。藍、繭、木炭、工芸品を近隣の村々から集めた。また、秋田県内各地と青森県の弘前も商圏としていたことが次の表からわかる。

米や五十集(加工魚)は若干自家消費をして転売し、葉藍は一部を藍玉に加工し、藁細工はそのまま転売していることがうかがえる。特に繭の取引は盛んで、春秋2回市が立った。

『比内町史』より

輸 出			輸 入		
品名	数量	輸出先	品名	数量	輸入先
米	2,500 石	鹿角郡花輪・毛馬内・ 北秋田郡・山本郡	米	3,000 石	当町近傍町村
五十集	45,000 俵	鹿角郡花輪地方	五十集	50,000 俵	青森県弘前・大館
葉藍	15,000 貫	青森県・秋田市・山本郡	葉藍	20,000 貫	当町近傍町村
玉藍	3,500 俵	青森県・能代・秋田市	玉藍	—	—
藁細工	100,000 ケ	鹿角郡花輪地方	藁細工	100,000 ケ	近傍町村鹿角郡

明治30年の扇田町の輸出入調書

(2) 扇田神明社の由緒

① 創建と遷座

扇田神明社に伝わる古記録によると創建は文治2年(1186)である。現在地へは、明和3年(1766)に寺社奉行に提出した由緒書によると天正3年(1575)に浅利勝頼が遷座したとされている。

現在の社殿は、^{ぼしん} 戊辰戦争で焼失後、^{さたけよしゆき} 佐竹義遵、^{もてぎともただ} 茂木知端が明治7年(1874)に再建したものである。

社殿は扇田地区の東にあり、扇田の人々は、朝昇る太陽とともに扇田神明社を見る位置関係になっている。

一般に神明社という名称は明治の初めに始まったもので、以前は伊勢堂、お伊勢様、鎮守様などと呼ばれていた。江戸時代の紀行家菅江真澄は享和3年(1803)「伊勢神宮をうつし奉った社」と言い、80頁の明治6年(1873)の扇田村略絵図には、^{ちんじゆしゃ} 鎮守社と書かれている。現在地の南に伊勢堂岱という地名が残っていることから、往時は扇田神明社がその地にあったとする説もある。

扇田神明社(別当扇田寺)は、江戸時代、南^{べっとうせんでんじ} 比内の頭巾頭(修験を取り纏めた役職)をた^{と きんがしら しゆげん} びたび務め、時には更に上位の職である大頭^{だいとう} 職も務めた。

② 戊辰戦争の激戦地

戊辰戦争の際に扇田神明社は激戦地となって血戦が繰り返され、社殿は扇田村の家々とともに戦火に消えた。現在、境内には杉の大木が林立しているが、倒木などを製材すると、銃弾が出てくることがある。それは、この戊辰戦争の時のものであり、激戦を現在に伝える証しである。また、境内には戊辰戦争で亡くなった兵士の墓が残っている。



扇田神明社



扇田神明社に伝わる浅利氏奉納短刀
(備前国住長船七郎衛門上尉祐定)



ご神木から出た戊辰戦争時の弾丸

(3) 扇田神明社の例祭

①佐竹の御神輿

扇田神明社に伝わる御神輿は、久保田城の御殿様から^{はいりょう}拝領したものとされている。

本殿に向かって右手には、大谷石造切妻屋根の^{みこしでん}神輿殿があり、新旧二つの御神輿が並んで安置されている。左側にある御神輿(写真 - 1)が御殿様から拝領したといわれる御神輿で、年代は不明だが扇田神明社に伝わる宝物として、今も大事に保管されている。右側にある御神輿(写真 - 2)は昭和 43 年(1968)に作られ、毎年例祭時に使われている現行の御神輿で、どちらも佐竹宗家の家紋「^{ごほんぼねおうぎ}五本骨 扇に月の丸」である。

佐竹氏は浅利氏と同じ清和源氏義光流^{せいわけんじよしみつりゅう}で、慶長 7 年(1602)に秋田藩主となり、以後約 270 年間秋田の地を治めた。秋田藩で大館地方を管轄したのは佐竹西家^{にしけ}(大館城)であったが、同家の家紋は丸付きで、御神輿とは紋が異なる。お城のある久保田から見れば、遠い北東の外れに、なぜ佐竹宗家の御神輿があるのだろうか。佐竹氏入部の頃この地方では、浅利氏縁故の人たちが反乱をおこし、新領主を悩ませたが、^{おぼよしなり}小場義成(初代大館城代)^{そうげんしょう}そして僧玄性の活躍でそれも落ち着いた。



写真 - 1 佐竹宗家より拝領の御神輿



写真 - 2 現在使用されている御神輿

一説には、荒れる地方を^{ちんぶ}鎮撫するため、ここ扇田神明社に御神輿が贈られたとされている。この御神輿は、佐竹氏秋田入部の際水戸から特別に久保田に移したものであることから、扇田を中心とした米代川南地区、いわゆる^{にゅうぶ}南比内を重視していたことがうかがえる。前領主の秋田氏が浅利旧臣と決着をつけられず、引き継いだ佐竹氏も苦勞したのであろう。

また、扇田神明社には、御神輿拝領の経緯が次のように伝えられている。あるとき佐竹侯がお立ち寄りになり、境内にて野立ての茶会を催した。^{おやかたさま}御屋形様たいそうご機嫌うるわしく、茶会で使用した家紋入りの^{じんまく}陣幕をお下げ渡しになり、家紋の使用を許された。これ以降、扇田神明社の社紋は「^{しゃもん}五本骨扇に月の丸」となり、これがきっかけで御神輿が贈られたというものである。

さて、お殿様が御神輿をくださるということで扇田の町衆は^{じんびんこつがら}人品骨柄卑しからざる者 28 人を^{はくちょう}厳選し、久保田へ向寄せた。御神輿を頂戴した 28 人の白丁は、船で米代川を

上って扇田まで無事持ち帰り、下川端の船着き場で陸揚げした。往復 10 日の日程であった。この時の 28 人の家は、白丁の家と呼ばれ、現在まで 20 の家が続いている。

今でも、御神輿の飾り付けから運行まですべては白丁が行い、余人は指一本触れることが出来ないとされている。

②例祭

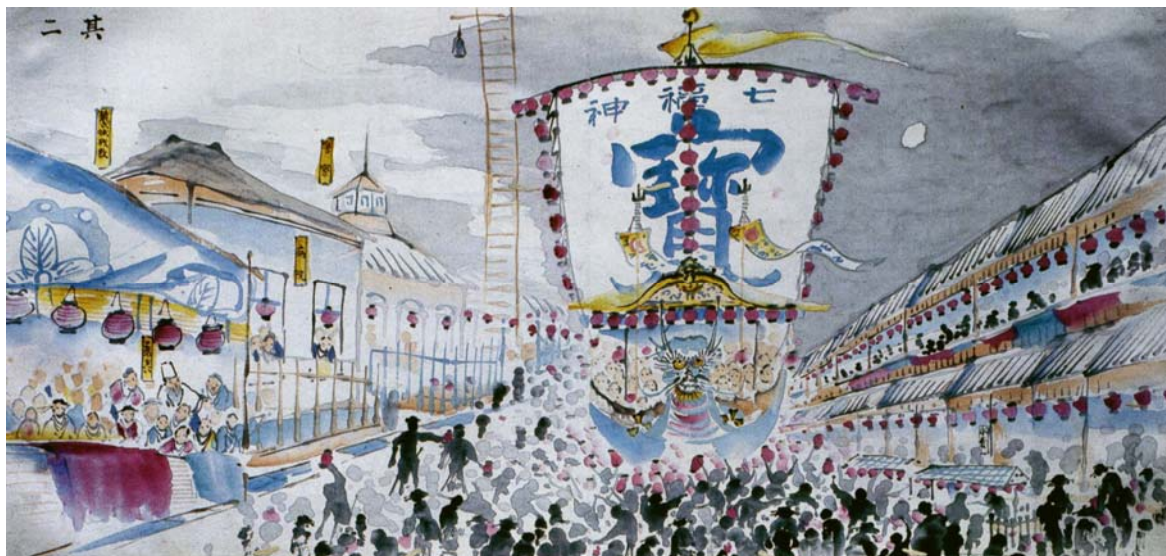
例祭は、創建当時からあったと思われるが、記録としては郷村史略(安政5年(1858))に「伊勢 祭祀六月十五日」とあるものが古い。現在の例祭は7月15日、16日に行われている。

扇田地区全域を氏子の範囲とするこの例祭は、毎年5月下旬、各氏子町内から集まった総代、神社委員(町内の規模により1~2人)の合同会議が開かれ、今年度の予算が決められ、前年度当番町内から新しい当番町内への引継ぎが行われる。氏子町内は全部で19あるが、笹淵を除く18町内が三つに分かれ毎年交替で当番町内となる。

担当年	当 番 町 内 名
平成 28 年度	しんちょう しもかわばた かみかわばた いちかわ しんまち いせちょう 新 丁、下川端、上川端、市川、新町、伊勢町
平成 29 年度	おおまち なかまち ばくろうまち よこちょう みなみちょう おうぎのちょう 大町、中町、馬喰町、横町、南町、扇ノ丁
平成 30 年度	あけぼのちょう しのめちょう はちまんちょう うらどおりまち ひないちょう あさひちょう 曙 町、東雲 町、八 幡 町、裏 通 町、比内丁、朝日町

例祭の前は、近隣の神官で構成する「雅楽会」を月に一度開き、三管(笛、箏、笙)の練習をする。

7月に入ると、白丁は幟旗の準備をして神社の参道に設置し、稚児の乗る屋台を作って飾り付けをする。稚児は当番町内からの推薦で、未就学の男女各1人が務めることになっている。



明治 28 年扇田祭典の図 養虫山人(土岐源吾)画

○7月14日

各町内は会所を準備し、さらに大通りに面した町内は、御神灯ごしんとうを高く掲げ、御神輿を迎える準備を整える。



中町会所の準備の様子



大町の会所と御神灯

○7月15日 宵宮

午後1時に神事を行い、その後扇田神明社から各町内の会所に御幣ごへいを授与する。それを会所に飾ると正式に会所開きかいしょびらとなる。

会所開きの後は、ほかの町内にごあいさつあいさつじょうに回る。うちの若い衆に不始末があったときはこちらに連絡くださいというわけである。また、うちの町内を山車やまやこどもみこしが通る際はここにお知らせくださいという通告でもある。外交担当が2人1組で出かけ、ほかの町内の会所に挨拶状あいさつじょうを置いてくるのだが、最盛期には8軒もの造り酒屋があった土地柄である。その際お酒が出され、それを拒否することは大変失礼なことであるとされているため、各町内は人選には気を配り、強者が外交担当つわものに選ばれるのが通例である。

午後1時30分、囃子山車と各町内の子供みこしがお祓いを受け、賑やかに町内をめぐる。



例祭時は拝殿の外部建具が取り払われる



全町内が集結し神事が執り行われる

午後7時、花火(のろし)が上がり、宵宮祭である。宮司が祝詞を奏上し、2人の巫女が豊栄の舞と浦安の舞を奉納した後、玉串の奉奠と拝礼が行われる。



各町内に御幣が授与される



御幣を飾る大町会所



新町会所に挨拶する市川外交の皆さん



南町の子供みこし

○7月16日 例祭

午前8時、例祭の神事は、祝詞奏上、浦安の鈴舞を奉納し、玉串を奉り拝礼となる。宮司、氏子総代会長、責任役員(2人)、氏子総代代表、神社委員代表、当番町内代表、猿田彦、白丁頭、稚児代表の順である。なお、猿田彦は代々同じ家が務めている。

続いてご祭神が御神輿にお移りいただく神幸祭である。神官が立ち並ぶ荘厳な雰囲気の中お出ましとなる。

午前9時30分、御神輿が出発。列の並びは、先触れを先頭に、笛・太鼓—猿田彦—角祓—神宝(楯・槍・剣)・神主—御神輿—神馬—稚児—総代の順である

御神輿が各町内を回る際、会所には重大な任務がある。町内名を染め抜いた紅白の法被をまとった各町内の外交担当は、弓張提灯を持って町内の入口で御神輿をお迎えする。そして、町内を恙なくお通りいただき、次の町内に引き継ぐという役割である。かつては、先払いとして白砂を路上に撒きながら先導したものだが、近年は数町内にのみこの伝統が受け継がれている。



例祭



前列左から白丁頭、猿田彦、祭典実行委員長



御祭神に御神輿に御移りいただく



御神輿渡御



提灯を飾る乳井家



今も残る昭和20年頃の御旅所表札(乳井家)



御神輿を待つ御旅所当主夫妻



御旅所神事を終え出発する御神輿

また、新町の宮嶋家^{みやしま おたびしよ}が御旅所と定められており、ここでは御旅所神事が行われる。もとは造り酒屋の立派な家で、白木の塀をまわしているが、年に一度この日だけ開く専用の門を開き、御神輿をお迎えする。かつて久保田城から拝領してきた御神輿が陸揚げされた下川端船着き場付近でも神事が執り行われる。

御神輿の順路中、歴史的建造物の前を通過するが、江戸時代の建造物としては徳栄寺^{とくえいじ}、明治時代の建造物としては扇田神明社のほか正覚寺^{しょうがくじ}、長泉寺^{ちようせんじ}、宮嶋家住宅、武家門^{ぶけもん}、乳安商事^{にゅうやす}などが挙げられ、大正から昭和初期の建物としては、赤井家住宅、菅原家住宅がある。

御神輿が扇田神明社^{かんぎよ}に戻ると還御の神事を行い、例祭の日程を終える。

夕刻になると、各町内の会所もまた終了の時間である。会所開きの時と同様に各町内の会所に会所仕舞いのあいさつに回り、すべての会所のあいさつが済むと会所は閉められる。

その後も氏子の家々では親戚や友人などが集まり、特産の比内地鶏^{ひないじどり}を使ったきりたんぽなどを食べながら、お祭りはまだまだ続く。なおこの地方の人々は、すべからく我が家のきりたんぽが一番おいしいと思っており、何か行事があると、季節に関係なくお客様にふるまわれるのである。

御神輿渡御^{とぎよ}の順路は次頁のとおり。



会所前で拝礼を受ける御神輿



御神輿先導の引継ぎを待つ大町外交



無事戻ってきた御神輿



還御の儀



扇田神明社御神輿巡行図と歴史的建造物や神社仏閣 (地図：出典国土地理院)

③ジャジャシコ

ジャジャシコは春に行われる火伏祭で、
先導者が 錫杖しゃくじょう を突いて歩くときのジャ
ジャジャという音が名前の由来である。
幕末、大火が続いたことを憂いいた市川いちかわ
肝煎きまじりが始めた。市川は扇田神明社の所在
する町内で、古くは扇田の枝郷であった
が、幕末の時点では既に家並は扇田と繋
がり、一体となっていた。

扇田神明社は鎮守社として、古来里人
のため祓はらい、清め、鎮めてきた。ジャジ
ヤシコは、春告祭しゅんこくさいでありながらもその
本質は鎮火であり、神職により家々を祓
い清める祭である。

桜の開花にはまだ早い4月3日の朝、
扇田の人々はバケツに水を汲み、小皿に
塩ひしゃくを盛って柄杓とともに玄関先に置き
神官の一行を待つ。

賑やかなところはなく、仰々しい儀式
もないが、数人の神主が淡々と1日かけ
て扇田町内の約1,000軒もの家をまわる
行事として百数十年続いてきた。

戦前はジャジャシコの経費が町費で賄むわれていた記録があ
り、明治の中頃から神武天皇祭に合わせて4月3日となって、
現在まで続いている。

昭和初期の北鹿朝日新聞には、昭和11年(1936)4月3日
「鎮火祭延期」との記事がある。雪解けが遅いため10日頃ま
で延期したのだ。ほかの年には「冬囲等危険物を一刻も早く
取り除く事」とあり、冬囲いが火事の原因であったことや、
ジャジャシコが雪解け後の春告祭であることがうかがえる。

当日の朝は、扇田神明社で神事を行った後、錫杖を持った
消防団員2人を先導に、太鼓を打つ白丁(例祭の白丁とは異なる)とともに6人の神職(うち2
人は法螺貝ほらがいを吹きながら)が扇田の家々を廻る。玄関先おおぬさを大麻はらで祓はらい、手で塩を撒き、水を柄
杓で高々と振りかける。家人が外へ出て空を見上げ、神職が撒く水を見上げる。無事に春がや
ってきたことをしみじみと感じる風景である。



扇田神明社からジャジャシコに出発する神職たち



玄関先で水を撒きお祓いする



錫杖を持つ消防団員

(4) まとめ

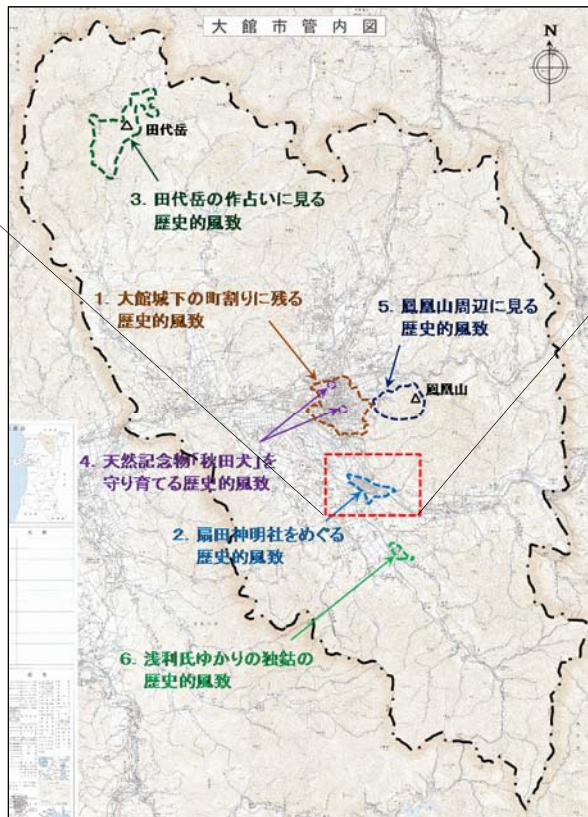
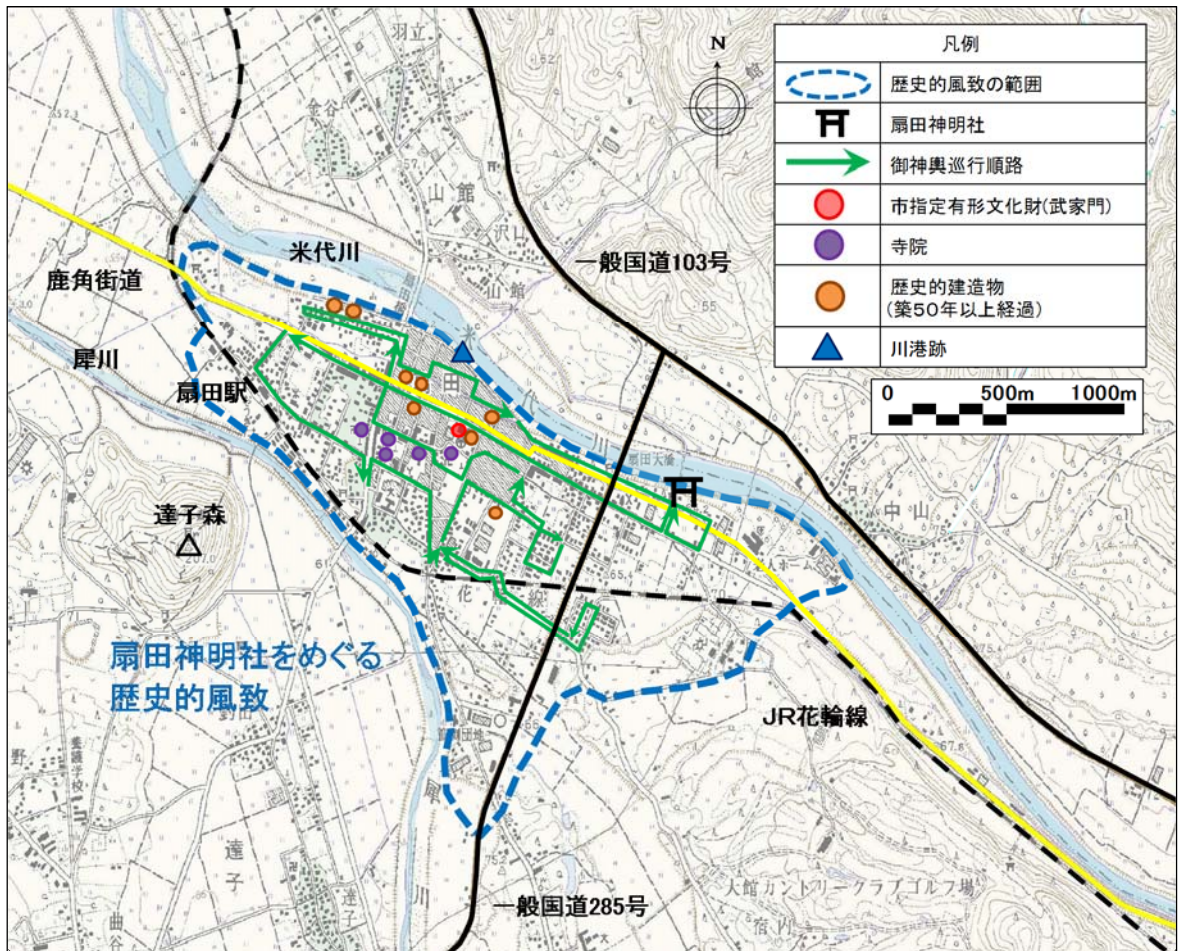
扇田は米代川の川港、近郷近在きんごうきんざいの物資の集散地として、また、市いちが立ち商業地として発展してきたが、人々は折々の伝統行事も忘れずに伝承してきた。

扇田神明社の例祭では、住民が誇りとする佐竹宗家ゆかりの御神輿が古式に則り白丁によって扇田地区の全域に渡って渡御され、御旅所や各町内では伝統としきたりを守ってお迎えしお送りする。数百年前から連綿と受け継がれる昔と変わらぬ様式を、各町内で、また地域内で共有しているのである。

ジャジャシコでは、扇田の隅々まで神職がまわって家々を祓い清め、住民は冬囲いはずして神職を迎え、打水うちみずを見上げて冬の終わりと春の訪れを実感する。幕末以来続くこの祭もまた、ジャラジャラという錫杖の音とともに地域の住民に受け継がれている。

二つの行事は、どちらも神々を人々の生活の場にお迎えする祭であり、古くから扇田地区全体で行われ、扇田地区の発展とともにその範囲を拡大してきた。

これらは、戊辰戦争後に建てられた寺社や商家や古民家とともにあって地域の人々の営みの継続性と一体感を醸成する場となっており、大館市が守り伝えるべき歴史的風致となっている。



扇田神社をめぐり歴史的風致の範囲 (地図：出典国土地理院)

【コラム】

○ハッタギ踊り

ハッタギ踊りは扇田の盆踊りである。大館市内のオリジナルの盆踊りはこの踊りのみである。始まりは江戸時代と言われている。戦前は、景気の良い年に町の地主にお伺いを立て開催していたようで、毎年のもものではなかったらしい。

ハッタギ踊りが開かれる場所は、時代により変遷しているが、現在は扇田小学校正門前から北に延びる市道を占用して行われている。

命名の由来は、当地でハッタギとはバツタやイナゴの事で、飛び跳ねて踊る様がバツタのようだからという説と、飛び跳ねて手足を前に出す姿が稲のイナゴを追い払う様子を模したものだという説がある。盆踊りにつきものの太鼓は、農家が多い川端と市川だけが担当していることから、農業との関連も指摘されている。

夕方は子供たちも踊るが、午後8時頃になると花火をもらって家に返され、それからは大人の時間である。

現在は8月17・18日に行われる。

○山コチンチコ

山コチンチコは子供七夕である。扇田小学校の町内子供会ごとに絵灯籠を作り、リヤカーに乗せるなどして扇田町内を練り歩く。

戦前は、山コチンチコが町内を回ると「お花」としてロウソクがあがり、子供たちはそのロウソクを換金してお菓子などを買って楽しんだが、戦前のある年禁止されてしまい、開催が一時中断された。

その後扇田小学校の創立100周年を機に過去の事業を見直していたOBたちの目に留まり、100周年記念事業として昭和48年(1973)復活した。扇田小学校の100周年記念誌には、「ただ単に子どもの祭だけではなく、老人大人全町あげて往年の行事を盛り返そうという意気込み」「子どもの夢を育てるこのような行事は絶やさず、いつまでも続けてほしい」とあり、その期待に答えてPTA事業として現在まで続いている。

ジャジャシコ、ハッタギ踊り、山コチンチコと扇田にはカタカナの伝統行事が多いが、理由は不明である。方言を漢字にしにくかったのだろうか。なお、近年見ることはなくなったが、盆の送り火をボッキンコと呼んでいた。



ハッタギ踊り



山コチンチコ

○比内とりの市

昭和60年(1985)1月下旬の土日、ふるさとの冬祭「比内とりの市」が始まった。この当時は「比内地鶏」を特産物として全国に売り出そうと官民挙げて汗を流しており、祭の軸は食^{しよくちよう}鳥への感謝であった。

当日の朝9時、扇田神明社でお祓いを受けた一隊が幟旗を持った白丁を先頭に、この年七五三の稚児たちが馬そりに乗って続き、祭会場へ向け出発する。隊列は雅楽の調べとともに町内をめぐって祭会場へ到着する。馬そりが、市指定文化財「武家門」の前を通過するシーンは趣^{おもむき}がある。到着した会場には木製の社が設置されている。そこで行う感謝祭がメイン行事である。感謝祭では神職がここで祭事を執り行う。

2日間にわたり、およそ3万人が来場し、「見る、食べる、遊ぶ」というイベントを楽しんでいく。

比内とりの市は食べ物への感謝をバックボーンとして、30年以上続いている。



比内とりの市 神迎いの儀



白丁人の町内巡行

3. 田代岳の作占たしろだけ さくうらないに見る歴史的風致

田代岳で行われる作占たしろやまじんじゃには、秋田県北部地方から青森県南津軽地方に及ぶ広範囲から、たくさんたしろだけの登山者が訪れる。また、古くに建立された山頂の田代山神社は、厳しい気象条件にさらされ何度も被害を受けてきたが、その都度関係者が再建、修理を重ねてきた。

田代岳を望む市内の各地には、今でも豊作を祈願するために地域の人々が建立した田代山の神社や石碑が残っている。

(1) 自然環境

白神山地に属する田代岳(標高1,178m)は、秋田・青森の県境近くに位置し、西方に連なる雷岳らいだけ えぼしだけ、烏帽子岳ちやうすだけ、茶臼岳とともに形成する四山の連峰である。

主峰田代岳は眺望が開けていて、岩木山や八甲田連峰、岩手山、八幡平、森吉山といった峰々が展望できるほか、9合目の標高約1,000m地点に広がる高層湿原ちとうには、大小合わせて120以上の池塘が点在し、ミツガシワをはじめとする多数の高山植物が、一帯に生育している。

6月から8月にかけては、湿原一帯が百花繚乱りょうらんの花畑となることから、「雲上のアラスカ庭園」とも称され、多くの登山者で賑わう。

大広手おおひろて、荒沢あらかわ、上荒沢かみあらかわ、薄市沢うすいちさわの登山口周辺には、滝、溪流、ダム湖といった景勝地もあり、周辺一帯は昭和50年(1975)1月に県立自然公園に指定されている。



田代岳山頂と池塘



9合目池塘と周辺の山々

(2) 周辺地域の風土

田代連峰の東西を南下する岩瀬川いわせと早口川はやぐちが米代川よねしろに合流し、その山間の川沿いに開けた農地に集落ができ、田代地域が形成されてきた。古くから米代川流域の舟運うしゅう、羽州街道の中継地として機能し、江戸時代には田代岳周辺の鉱山開発が、活発に行われるようになった。

その数は、文政期(1818~1829)の記録によると、秋田領内の鉱山数で第3位(山瀬地区22カ所)と第4位(早口地区20カ所)を占めるほどで、長慶金山ちようけいや赤倉あかくら鉱山の硫黄ひたちない、比立内の鉛石など良質な鉱山に恵まれ、



五色の滝

鉦石は馬を利用して米代川沿いまで運び、舟運により大巻港から積み出した。

その後、森林資源の需要が高まり奥地まで森林軌道が敷設され、早口駅まで搬送された木材は、鉄道を利用して各地に出荷された。やがて、木工、鉄工などの関連産業も興り、生活が安定するにつれ、この地域には、様々な民俗芸能や信仰行事が生まれた。今なお受け継がれているものに、農業信仰に基づいた田代岳の作占い、山田・蛭沢集落の獅子踊り、代野集落の番楽・ニッキなどがある。

旧田代町(地元)の町名が「田代岳」に由来することからも、信仰とふるさとの象徴である「田代岳」への愛着の深さがうかがえる。

(3) 田代山神社と田代山信仰

①田代山神社の歴史

田代岳は、山そのものが御神体で、昭和初期までは霊峰田代山と呼ばれていた。

山頂の田代山神社には「白髭大直日大神」が祀られ、9合目には「山の神」の御神体、
「大日貴命」と「小彦名命」の御神体がある。

毎年、半夏生(7月2日頃)に9合目の湿原で行われる「作占い」が信仰の対象となっており、秋田県北部から青森県南津軽地方に及ぶ広範な信仰圏から大勢の登山者が訪れる。

田代山神社の歴史は古く、次のような様々な記録が残っている。

- ・【仁寿2年(852)】慈覚大師円仁の使僧が十一面観音を勧進し、山岳仏教の霊山として開山(秋田県神社神道史)
- ・【弘長2年(1262)以前】開基常覚院による創建(綴子神社の縁起由来書)
- ・【建武元年(1334)】陸奥兼出羽守北畠顯家による長慶金山開発時に再建(秋田県神社神道史)
- ・【天正年間(1573～1591)】創建(社伝)

また、地元には「津軽の獵師彦之丞が、獲物を追って田代岳山頂まで来たところで、幾多の水田を発見し、驚いていたところに白髭の白髪で白衣の翁が現われ、この翁を白髭大神として祀ったのが、田代山神社の始まり」と記された由来書が残されている。



田代山神社

遮るもののない山頂の環境は想像を

絶するほど厳しく、歴代の社殿は幾度となく自然災害による損傷を受けてきた。近年の記録では、昭和61年(1986)に落雷で焼失し、平成3年(1991)の台風19号では全壊しているが、いずれも関係者の尽力により翌年に再建されている。

社殿の傍らにある石造りの小祠しょうしは、明治43年(1910)に奉納されたものである。

また、9合目湿原の南側木道脇には、自然石に「山の神」と刻まれた御神体があり、更に南側の前岳の端にも「大日貴命」と「小彦名命」と刻まれた1 m以上もある大きな自然石の御神体がある。年代は詳しく分かっていないが、木道の無かった時代から残る信仰の足跡である。

連山をなす西方の鳥帽子岳山頂には、明治41年(1908)に奉納された白髭大神の石像がある。小祠の奉納者が旧大館市、石像の奉納者が旧比内町の在住者であることから、山の信仰が遠くまで及んでいたことがわかる。

②各地に残る田代山神社や石碑

農民がこの地方のほとんどを占めていた時代に、豊作を祈る信仰心の篤い信者たちは、田代岳まい詣りを重ねる一方、集落に程近いところに里宮や信仰碑を建立し「田代山」を祀ってきた。今も市内の広い範囲に「田代山神社」や「田代山」などと刻まれた小社しょうしゃや石碑が残っており、その建立年を見ると古くからの信仰がうかがえる。一番古い年代は、慶応元年(1865)に建立された大館神明社境内の石碑である。

大正7年(1918)の御神体を祀る青葉町あおば(次頁：図⑦)の田代山神社では、田代町ちよう・南町みなみちようの氏子が、毎年欠かさず6月5日に例祭を続けている。

今も残る「田代町」の名前は、地元の神社が由来ではないかと言われている。



山頂の小祠
明治43年奉納



「山の神」御神体



「大日貴命」と「小彦名命」の御神体



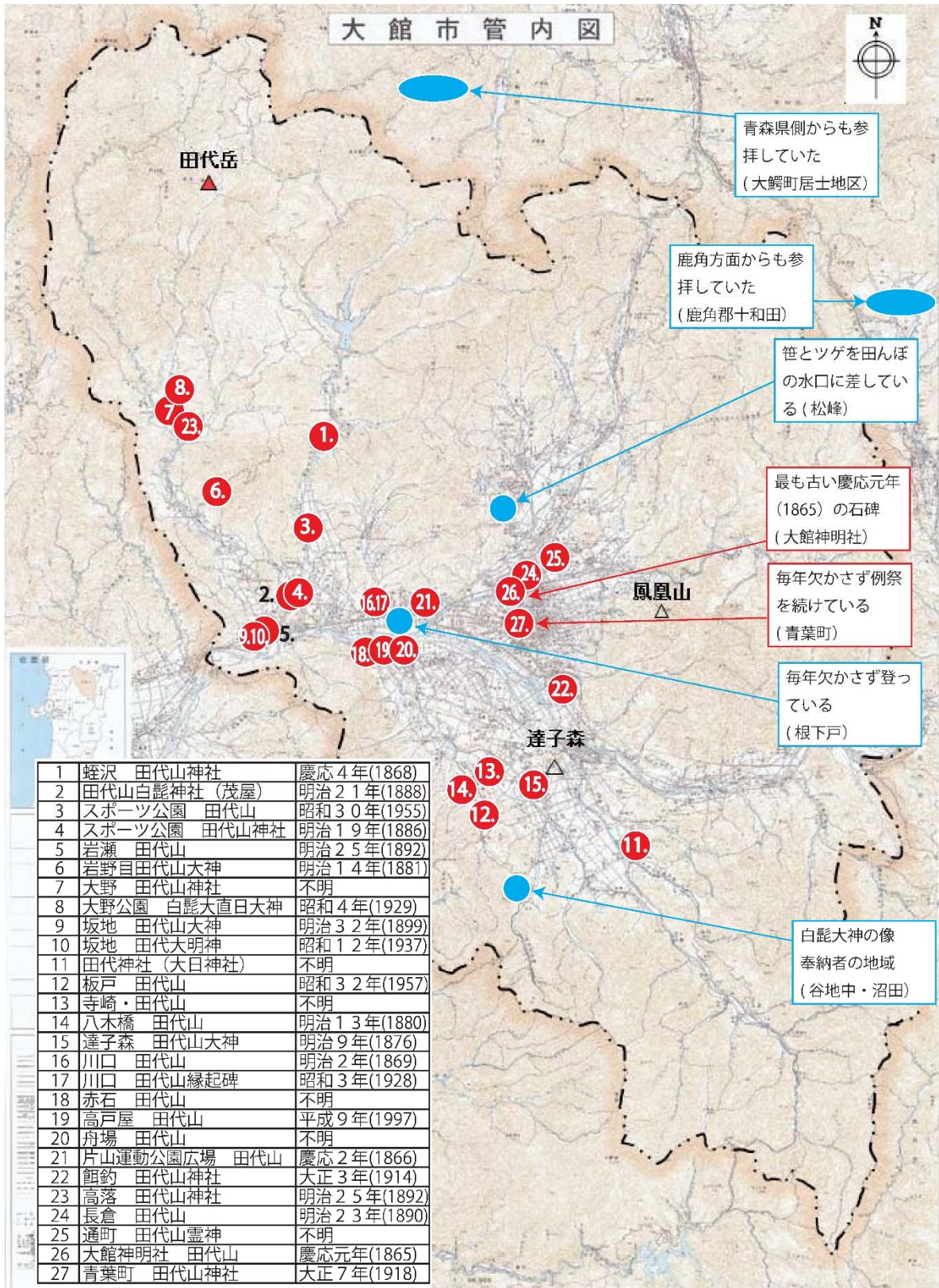
鳥帽子岳山頂の白髭大神石神像
「明治四十一年旧六月吉日」 建立



青葉町の田代山神社例祭



分社した御神体



田代山信仰の広がり(田代山の信仰・神社・石碑) (地図: 出典国土地理院)

③田代山信仰

古くからこの地には、田代山神社へ参拝して雨乞いをする風習があり、寛政7年(1795)と天保7年(1836)の早魃^{かんぼつ}の年に、大館市花岡^{きもり}の肝煎、鳥潟半左衛門(扇峰)一行が雨乞いをした紀行文『田代山道の記』が残されている。祈りは見事に功を奏し、帰路に霰まじりの小雨が降りだしたと記され、「われわれが命に替えん一夕立」と句を詠んでいる。

また、津軽側には江戸期の平尾魯仙の著書『谷の響』に次の記録がある。天保10年(1839)に連れだつて田代岳に参詣^{さんけい}した百姓3人が、帰りに6尺もあろうかという大女に遭遇し、滝壺で水を巻き上げられて大雨となり逃げ帰った。「山の神」は、女の神で嫉妬心が深いため、田代山は昔から女人禁制の山とされてきたのである。

白髭大神は、田神、水神、作神ともいわれ、田代岳は雨乞いの山として広く知られるようになり、「点々と水を湛^{たた}えた池塘の守護神である白髭大神に祈願することで、豊饒^{ほうじょう}の雨を田んぼに授かる」といったこの地方独特の農業信仰が、根付いたものと考えられる。

今でも半夏生には、豊作を祈願する農業者や安全・健康を願う登山者たちが、山頂の田代山神社を目指し、参拝するのが年中行事になっている。



白髭大神絵図(綴子神社所蔵)
田代山神社に祀られている
白髭大神のモデル

(4) 田代岳の「作占い」

①作占いの時期と準備

田代山神社の例祭は、毎年、半夏生の前日から2日間の行程で神事が行われる。

前日は、早朝に宮司と氏子数名が山頂に登り、宵祭りと本祭りの準備に取り掛かる。

神社内を清掃し、玉串奉奠^{たまぐしほうてん}用のクマザサを用意、鳥居にしめ縄の取り付けなどを済ませ、入念に準備を行う。

夕方近くになると9合目湿原へと下りて行き、いよいよ池塘で「作占い」を行うのである。



池塘のミツガシワ

②作占いの手順

初めに、山頂に一番近い「^{おくて}晩稲の神の田」で、晩生種の稲の豊凶を占う。

次に下方にある「^{なかくて}中稲の神の田」で、中生種の稲の豊凶を占う。

神職は、ミツガシワを稲に見立てて、茎の太さ、長さ、花(穂)の付き方、実の大きさなどを観察して判断するという。

次に「^{すいりょうみ}水量見の神の田」と称する隣の大きな池塘で水量占いを行う。池塘の中には岩があり、その岩の見え隠れで水量を占い、実際に手を入れてみて水温を探り、秋の稲刈りまでの田の水の具合や洪水、冷害などの災害の有無を占うのである。

続いて、田代山全体の御神体とされる「山の神」の前で祈りをささげる。

この石碑は、木道のすぐ側にあることから、登山の無事を祈って参拝する者も多い。

かつては、最初にこの石碑を拜んでから「作占い」に入ったとされている。

その後、湿原の一番南側の端にある「大日様と薬師様」の御神体で、これから1年間の里に降りかかる災い防止と皆の健康を祈願する。

次に、来た道を引き返し、木道を周回する形で「^{わせ}早稲の神の田」に行き、早生種の稲の豊凶を占う。



晩稲の神の田



中稲の神の田



水量見の神の田



「山の神」での神事



「大日様と薬師様」での神事



「早稲の神の田」



三五の池

最後に、一番水深があるとされる池塘の「三五の池」という神の田で、「賽護打ち」を行う。
 「賽護打ち」は、5個の賽銭に紙で作った羽根を穴にとおして付け、1個ずつ投げ入れて、沈み
 加減で風・水・早稲・中稲・晩稲を占う。



賽護打ち(投げ入れる)



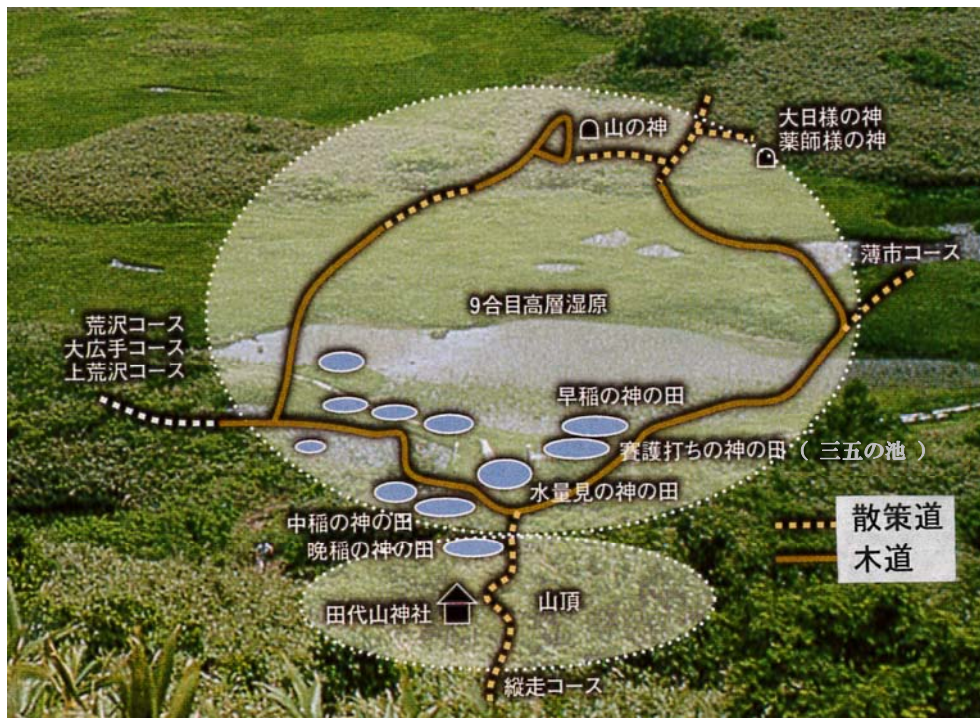
賽護打ち(着水)



賽護打ち(沈み加減を確認)

「賽護打ち」は占いの集大成であり、各種神の田での生育状況を加味して豊凶の最終判断を下
 すことになる。

こうして湿原での「作占い」の神事は全て終了する。



山頂周辺図

③宵祭り

湿原での神事を終えると山頂の社殿に戻り、田代山例祭の宵祭り神事を執り行う。湿原から山頂へ戻る間は、誰も神官と口を聞いてはならない習わしである。

夕方になり、辺りが薄暗くなる頃、宮司は、山頂社殿において氏子や神社関係者が参列するなか、奥殿に奉られている御神体「白髭大直日大神」の前で神事を執り行う。

神事が終わると、宮司から今年の「稲の作占い」の結果が、氏子たちに伝えられ、宵祭りの神事はこれで終了する。



神殿祈禱

④本祭りと参拝登山

夜が明けると、早朝から社殿において田代山神社例祭の本祭りの神事が執り行われる。

参拝者は、早朝から続々と山頂目指して登ってくる。

本祭りが行われる半夏生そうけい いなだま こもの日は、草徑に稲魂(霊)の籠る日とされ、田んぼの稲の収穫量を左右する大切な時期であることから、作占いは稲の生育過程を判断する目安ともされてきた。

地元は勿論、近隣市町村や隣県などから沢山の参拝者が訪れ、農民や篤信とくしんの崇拝者が小笹を神殿に捧げて、お祓いはらと豊作を祈願して、それを持ち帰って田んぼの水口に押し立て豊作を祈願するのが習わしとなっている。

今も半夏生に田代山神社を訪れる参拝者たちの中には、昔の風習を守り、束ねた小笹とつげを宮司きとうに祈祷してもらい、作占いの結果を聞いて下山の途に就く人たちがいる。持ち帰った小笹とつげは、一旦家の神棚に置き、翌日に田んぼの水口に供えられている。



笹とつげ



田んぼの水口の笹とつげ
(松峰地区)

⑤参拝登山の歴史と登山道

参拝登山は、田代山神社の傍らにある小祠が建立された明治43年(1910)頃にはすでに始まっていたと考えられる。

大館市根下戸町山岳会ねげとちょうが平成3年(1991)に発行した記念誌には、会員たちが昭和20年代から実際に行った参拝登山の記録のほかに、祖父母から伝え聞いた明治・大正期の記憶も記載されている。



毎年欠かさず登っている根下戸
集落(山岳会)の皆さん

明治の頃は、午前1時過ぎに集落を徒歩で出発し、帰り着くのは夕方であったという。

大正期には、農家の機動力であった裸馬を数頭連ね、ほら貝を吹きながらの登山をしていた。

昭和20年代頃からは自転車、昭和40年代頃からはテラー（耕運機に荷台をつけた農業機械）や乗用車などを使って登山口までたどり着いたという。

大変な思いをしながら、田代岳詣りを続けてきた記録を見ると、農家の人々の豊作を祈る強い気持ちがうかがえる。

地元紙、北鹿新聞のほくろく記事には、昭和34年(1959)「かづの鹿角郡十和田の田村礼次郎さんが、30歳の頃から1年も休まず30年間、田代岳に登り続けている」とある。

また、昭和59年(1984)に「おおわに いづち青森県大鰐町の居土地区の一団が、山頂に笛、鉦、太鼓を持ち込み、ねぶたばやしなど得意の曲と踊りを披露した」とあることから、田代山の信仰が広い範囲に及んでいたことがわかる。

かつての参拝登山は、居住地から延々歩いて登山口までたどり着き、それからの登山であったことから疲労困ぱいを極めたという。

現在では林道が整備され、大広手、荒沢、上荒沢、薄市沢が主要な登山口である。

いずれも登山口から約2時間から3時間で山頂に着く、比較的楽なコースとなっている。



明治36年 大館高等小学校の登山



馬を連れて登山した様子



登山口のテラー



大鰐町居土地区の一団



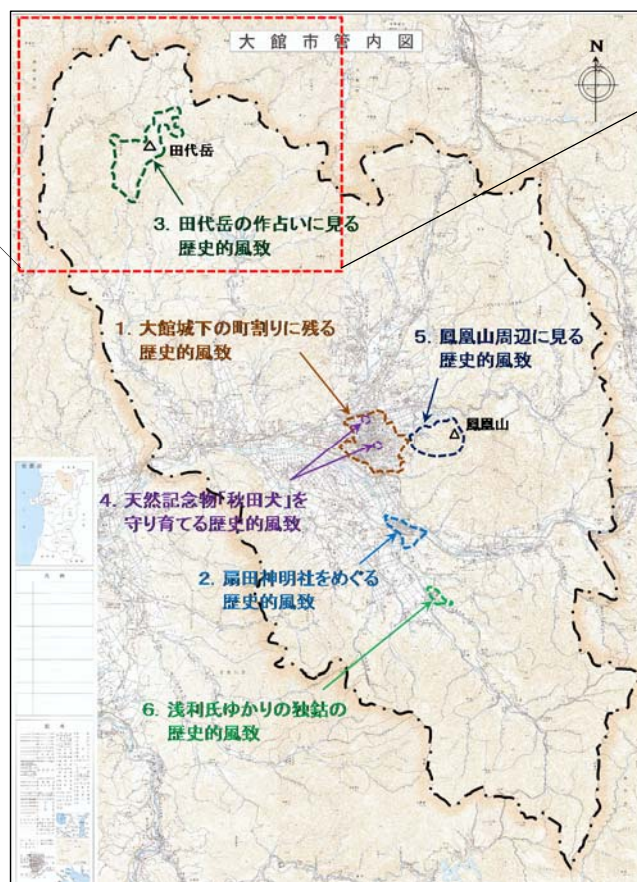
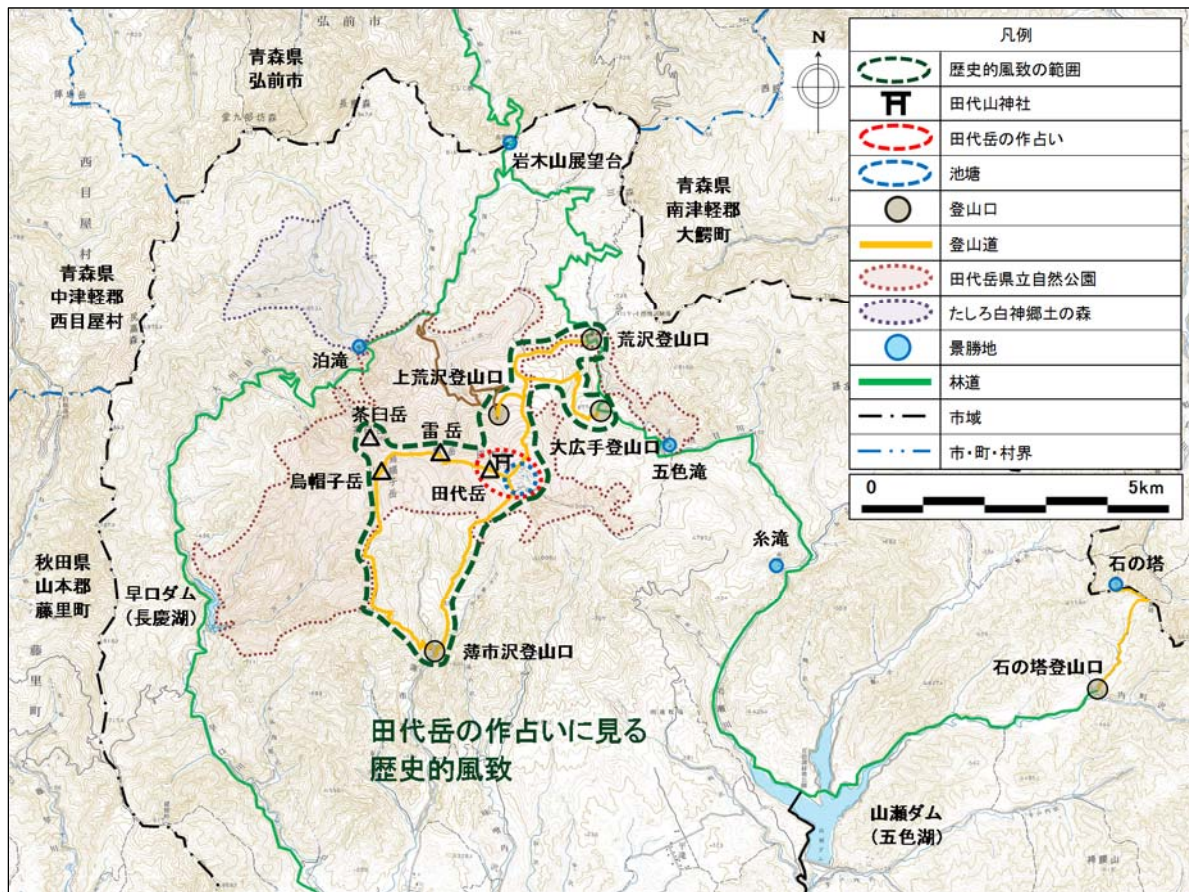
「半夏生」の参拝登山者

(5) まとめ

田代山信仰は、古くからこの地方において、生きていくための食糧生産に懸けた農民たちの精神的な拠りどころとされてきた。

昔の農村集落では、集落全部の田植えが終わるのを待って、若者など体力のある代表者が田代岳に参拝したという。大事な田植えを終えて、集落を代表する若者たちが歩いて田代岳山頂の田代山神社や祠を目指し、宮司から作占いの結果を承り、霊験あらたかな「笹とつげ」を集落に持ち帰る。集落では、若者たちの帰るのを待って、「早苗饗^{さなぶり}」(田植えを終えた祝い)を行ったと伝えられている。

農民たちの豊作を祈る大事な文化として、田代山の信仰が共有されてきたことで、この地方特有の風土が生まれ、今なお広い範囲に残され受け継がれている。今では農業者に限らず、五穀^{ごこく}豊穰^{ほうじょう}や生活安寧^{あんねい}を願う人々に、田代岳の作占いが受け継がれ、田代岳周辺に良好な歴史的風致が形成されている。



田代岳の作占いに見る歴史的風致の範囲（地図：出典国土地理院）

【コラム】

○田代岳周辺の伝統芸能

田代の御山に降る雨は、東西に流れて流域を潤し、地域独特の文化や信仰を豊潤に育んだ。ここで生まれた民俗行事は、五穀豊穰、豊年満作を祈願するもので、祭神を祀る神社に奉納されてきた。

だいのぼんがく ①代野番楽(市指定無形民俗文化財)

代野番楽の起源は、江戸中期に旅芸人が村に立ち寄り、お世話になったお礼にと番楽を伝授したのが始まりと伝えられている。

こうした番楽は、かつては近隣の中仕田、越山、山田の各集落にもあったが、現在は代野番楽だけとなっている。

代野番楽は、小正月の16日が幕開けで、11月10日の稲荷神社のお祭りを幕納めにしていましたが、現在は毎年元旦に代野稲荷神社に奉納している。

昭和の中頃に一時休止したが、伝統行事の復活を願う地元有志により、昭和48年(1973)に代野番楽保存会が結成され、今日まで継承されている。



代野番楽

やまだ ②山田獅子踊り(市指定無形民俗文化財)

山田獅子踊りの起源は、佐竹義宣よしのぶが秋田に移封を命じられた慶長7年(1602)が始まりで、慶長15年(1610)に小場義成が大館城に入城の際に豊年満作・無病息災を祈って披露し、お褒めの言葉をを受けて一層盛んになった。

戦時中は一時休止したが、昭和22年(1947)に再開し、昭和40年(1965)には若者有志による山田獅子踊り保存会が結成され、現在では集落全体で伝承している。



山田獅子踊り

ひるさわ
③蛭沢獅子踊り(市指定無形民俗文化財)

蛭沢獅子踊りの起源は、安永年間(1772～1780)と文化年間(1804～1817)の2説があり、先祖の鎮魂供養に奉納されたのが始まりと伝えられている。

獅子踊りは、蛭沢地区集会所前で、お盆の8月13日に奉納される。昭和30年中頃までは、蛭沢稲荷神社境内で神舞、集落の南側にある墓処で墓舞、蛭沢橋近くの民家の前で館舞が行われており、総勢50名が獅子踊りを披露していた。昭和47年(1972)に蛭沢獅子舞保存会を結成して、後継者の育成に努めている。



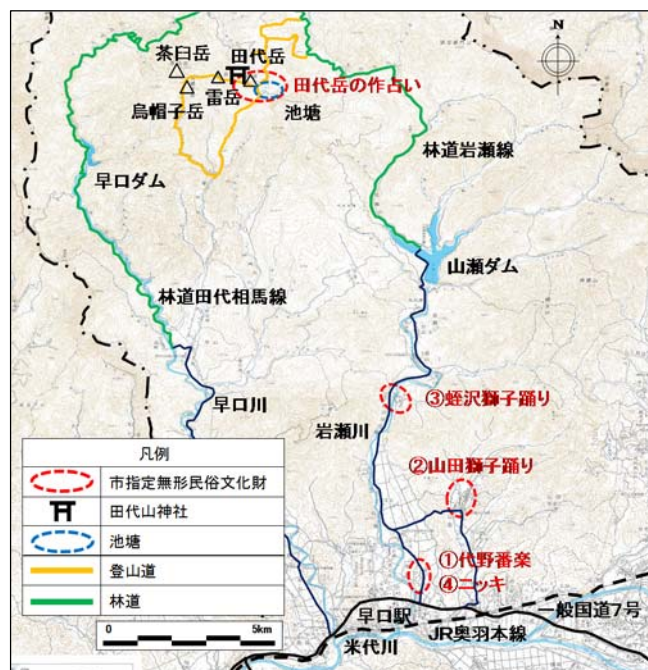
蛭沢獅子踊り

④ニッキ

ニッキは、代野集落に番楽とともに継承されており、その起源は、享保4年(1719)に無病息災を祈願して始めた民俗行事である。

ニッキは若木を意味し、新しい年の神の宿る木とされる。若木に新しい年の霊を宿らせ、集落内を祝福して歩くもので、当日は10歳前後の男児二人が頭にしめ縄と新木(ニッキ)のさかき 榊をつけて、墨を塗った顔で「ニッキ、ニッキ」と戸口で叫び、集落内を一軒一軒廻り、お初穂を貰う。最後に神社の庚申搭に頭のしめ縄を巻き付けて終了する。

以前は、小正月16日の朝6時頃に行っていたが、現在は元旦の行事である。



田代岳周辺の伝統芸能位置図 (地図：出典国土地理院)

4. 天然記念物「^{あきたいぬ}秋田犬」を守り育てる歴史的風致

本市には、国指定の天然記念物が6件存在し、中でも「秋田犬」は古くから人々の日々の暮らしとともに歩んできた。そして、大館城下を受け継いだ大館町に設立された「秋田犬保存会」が、大館城跡で本部展覧会を開催し、血脈を守る活動を継承してきた。

市民にとって、飼い主と秋田犬が散歩する姿は、大館の原風景そのものである。

(1) 天然記念物「^{あきたいぬ}秋田犬」

①秋田犬の歴史

日本犬の祖先は、最北系・中北系・南方系の3系統があり、この内最北系が、最初に日本に渡来したといわれている。形態的には大形・中形・小形の3系統があり、大形犬の代表が秋田犬である。

秋田犬は、江戸時代から武士や豪農に番犬として飼われ、大館城代の佐竹氏は、闘犬により家臣の闘志を養ったと伝えられている。明治後期からは闘犬熱が盛んになり、強い犬にするために土佐犬などの血が混じり、秋田犬の純粋性が危ぶまれるようになった。

このような時代、大館の人々は秋田犬を保存する活動を粘り強く続け、秋田犬は昭和6年(1931)7月、日本犬で最初の天然記念物に指定された。

戦後も純血種保存の活動を根気よく展開し、現在は全国各地で秋田犬が飼育されている。

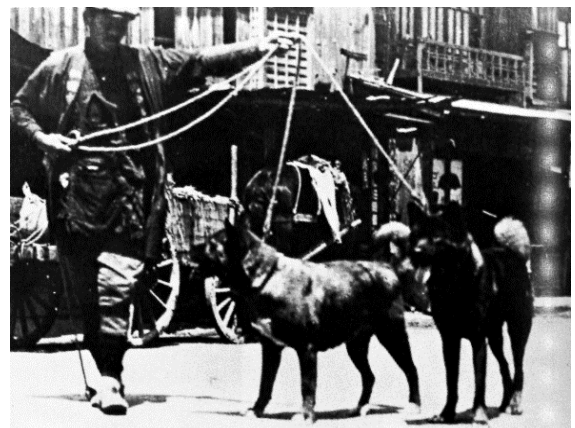
②秋田犬の特徴

秋田犬の特徴は、耳が開いて立ち、巻尾で、がっしりした骨格、筋肉の発達した四肢の堂々たる体躯から品位と威厳が感じられ、性格は鋭く勇ましい反面、おとなしく忠実である。

秋田犬は、大館地方が原産なので当初は「^{おおだていぬ}大館犬」と言われていたが、天然記念物に指定された際の名称が「^{あきたいぬ}秋田犬」であったことから、以後そのように呼ばれるようになった。



大正天皇へ献上した秋田犬



大正時代に^{かっぱ}まちを闊歩する秋田犬



天然記念物「秋田犬」

あきたいぬ
(2) 秋田犬の血脈を守る人々の活動

①秋田犬保存会の設立と運営

明治末期から大正時代にかけて強犬作出の風潮が強くなって、他犬種との交配が繰り返され純粋秋田犬が絶滅の危機に瀕したため、当時の泉大館町長をはじめ大館の愛犬家たちが保存活動を始めて、昭和2年(1927)には有志による「秋田犬保存会」を大館で結成し、純血種の探索と種の保存に取り組んだ。

こうした活動が実を結び、昭和6年(1931)には大館町内の純粋種10頭が天然記念物犬に指定されたのである。

その後、昭和11年(1936)には秋田県全体の「秋田犬保存協会」が結成され、会長には児玉知事が就任した。

秋田犬保存会は、昭和28年(1953)5月社団法人組織へ移行後、翌年には秋田犬保存会と秋田犬保存協会が一本化して現在の「秋田犬保存会」が誕生し、平成27年(2015)5月に公益社団法人となった。

本部を大館市に置いた秋田犬保存会は、昭和24年(1949)頃から全国各地に支部、総支部を設立し、現在では、東北北海道、関東、東海北陸、関西、中国四国、中国瀬戸内、九州に総支部が置かれ、その管下には49の支部がある。海外には、米国、中国、台湾、ロシア、ヨーロッパなどに12クラブがある。

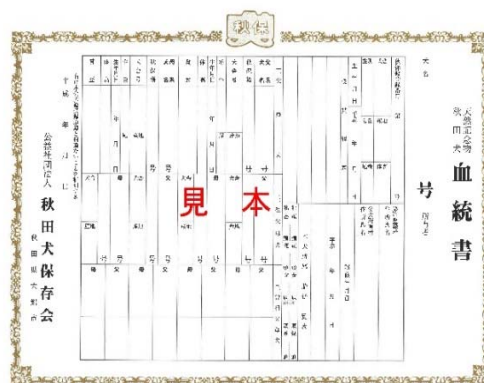
また、秋田犬保存会は、秋田犬の犬籍、犬舎号の登録及び血統書の発行を行い、天然記念物の血脈を守っている。合わせて、展覧会や研究会の開催、会報の発行により、秋田犬の保護・繁殖及び普及活動に力を入れている。

さらに、秋田犬保存会には、国内外の支部やクラブを通じて犬の出生届が提出され、純血として認定した70万件の血統書データを蓄積し、「秋田犬」の血脈の継承を図っている。

昭和47年(1972)には、会員数14,199人・登録数46,225頭に達したが、その後どちらも減少の傾向にある。しかし、最近秋田犬の人气が再燃しはじめ、特に海外での人气が急上昇し、本部展覧会に訪れる外国人観光客が増えている。



昭和45年大館へご訪問の皇太子、同妃殿下へ秋田犬の仔犬をお見せした



血統書



会報「秋田犬」

秋田犬会館は、保存会設立 50 周年を記念し、会員はじめ全国からの浄財により、昭和 52 年(1977)に建築された。内部には本部事務所のほかに博物室を整備している。

昨今では、玄関で実物の秋田犬と対面できることから大勢の方が訪れている。

また、国道 7 号を跨ぐ桂城橋は、地元建設会社の寄附により昭和 53 年(1978)に架橋され、秋田犬本部展覧会を開催する「桂城公園」と秋田犬会館を繋いでいる。



三ノ丸に位置する「秋田犬会館」と「桂城橋」

②「秋田犬」標準(審査基準)の制定

秋田犬保存会では、昭和 13 年(1938)に秋田犬標準を制定し、正しい秋田犬のあり方として「沈毅にして威厳を備え悍威に富み、忠順にして素朴の感あり、地味な中に品位を持ち、感覚鋭敏にして挙措重厚敏活ともに備える」と示している。

具体的には、本質と表現、外貌、頸、頭、耳、眼、口吻・鼻、齒牙、胸腹、背腰、前肢、後肢、尾、被毛、毛色の 15 項目について「標準」を定め、展覧会での審査基準としている。

さらに審査では、減点対象・失格要件を定めて基準を明確にしているほか、ガイドラインにより各チェック項目のポイントを定め、審査の透明性を高めている。

また、秋田犬保存会では、良い秋田犬を輩出するためにその模範となる「歴代秋田犬保存会名誉章犬」や「作出功労犬」を広く紹介し、合わせて研修会や勉強会を開催するなど、優秀な秋田犬がたくさん育つよう奨励している。

No.	犬名	写真	No.	犬名	写真
1	いちのせき 一ノ関ゴマ		2	ごろうまる 五郎丸	
3	きよひめ 清姫		4	たいへい 太平	
5	たまぐも 玉雲		6	あずまざくら 東桜	
7	くもまる 雲丸		8	だいうんめ 大雲女	

「8頭の作出功労犬」秋田犬保存会資料より

③秋田犬展覧会

昭和30年代より桂城公園(大館城本丸跡)を会場に秋田犬保存会主催の本部展覧会が、毎年春に開催されている。

この展覧会のルーツとなる記録を探してみると、昭和17年(1942)に第8回全国秋田犬展覧会を大館で開催している。

戦後の昭和22年(1947)11月には、第11回(戦後第1回)展覧会が、大館の城南じょうなん小学校校庭(35頭出陳)しゅつちんで開催されている。

その後、全国各地で展覧会が行われるようになったが、本部展覧会の大部分は秋田犬保存会本部に隣接する桂城公園を会場に開催され、平成28年(2016)春の本部展覧会は134回目を迎えた。

毎年5月3日の本部展覧会には、自慢の愛犬を連れた会員や大勢の観光客が全国各地から大館に集まり、楽しみにしている市民とともに会場へ詰めかける。

秋田犬は、生後数カ月が最も愛らしく人気が高いが、犬としての完成美は3歳以降といわれている。

その頃から渋味のある古武士的風貌を呈し、幼犬、若犬、壮犬、成犬と成長するにしたがって良くなる犬こそ、本質の良い犬であるとされている。

秋田犬は大型犬なので、食糧難だった戦時中は、やむを得ず飼育を制限された時代もあったが、そんなときにも飼い主や家族は愛犬を山中に隠すなどして、秋田犬を必死に守ったという。

また、血縁が近くなり過ぎる弊害に鑑み、他県へ贈った雄犬のもとへ、交配に際し血縁の心配のない大館の雌犬を連れて繁殖した記録もあり、先人の苦労の積み重ねが、大館で開催されている本部展覧会に繋がっていることを考えると感慨深いものがある。



戦前の展覧会



昭和25年5月開催第14回全国秋田犬展覧会
大館町城南小学校校庭



平成28年5月開催第134回全国秋田犬展覧会
桜橋館を背景に桂城公園で開催する本部展覧会

④秋田犬と市民の活動

市民は秋田犬に対する愛着が深いだけでなく、その像やデザインにも熱い思いがある。

古くは、昭和 10 年(1935)に大館駅前への忠犬ハチ公銅像建立に始まり、その後も「忠犬ハチ公銅像維持会」の方々による銅像の保全が行われ、昭和 20 年(1945)の金属回収で銅像供出後は、「ハチ公銅像再建委員会」の関係者が熱心な募金活動を展開した。



大館駅前で開催している「ハチ公生誕祭」

その結果、昭和 39 年(1964)に大館駅前へ「秋田犬群像」の建立が実現し、昭和 62 年(1987)には「忠犬ハチ公銅像」を同じく大館駅前に再建された。

ハチ公の慰霊際は、昭和 10 年(1935) 3 月 8 日のハチ公の死を悼み、同月 12 日に蓮荘寺で行われたのが始まりであり、大館駅前のハチ公銅像のもとに愛犬家や市民が集まり冥福を祈った。現在では、忠犬ハチ公銅像及び秋田犬群像維持会の活動を秋田犬保存会が継承し、毎年 4 月にハチ公の慰霊祭、10 月に生誕祭を開催して、大勢の市民と一緒に往時を偲んでいる。

⑤秋田犬による交流

秋田犬が縁で、国内外へ交流が拡大している。古くは、昭和 12 年(1937)、奇跡の聖母ことヘレン・アダムス・ケラー女史が来日し、秋田県で講演会を行った際、「記念に忠義な秋田犬を連れて帰りたい」と語られたことから、秋田警察署の小笠原巡查部長(大館出身)が連れてきていた生後間もない仔犬を贈り、女史とともに海を渡った。

この仔犬「神風号」は、渡米 2 箇月後、病気で死亡したため、昭和 14 年(1939)に再び小笠原氏の愛犬「剣山号」がケラー女史のもとへ贈られ、両国の親善に大きく貢献した。

また、忠犬ハチ公の縁で大館市(ハチ公の生まれ故郷)、東京都渋谷区(ハチ公が暮らした街)、三重県津市(ハチ公の飼い主、上野博士の出身地)、山形県鶴岡市(ハチ公を世に広めた斎藤弘吉の出身地)との交流が古くから続いている。

平成 24 年(2012)には、佐竹秋田県知事から、愛犬家として名高いロシアのプーチン大統領へ、東日本大震災時の支援に対する御礼と、大統領就任をお祝いとして、秋田犬保存会の協力により、当市で育った牝の子犬「ゆめ」が贈呈された。



ケラー女史署名入りのお礼書



秋田犬「ゆめ」の寄贈式

あきたいぬ (3) 秋田犬とゆかりのある町なみ

けいじょう ①大館城本丸跡の桂城公園

ぼしん
本丸にあった城館は、明治元年(1868)の戊辰戦争で落城、焼失したが、城跡の面影を残す石積みや土塁、堀が今も残っている。

なかじょう
城跡は、明治7年(1874)に中城学校用地となり、校名を変えながら小学校用地として利用された。その後、昭和29年(1954)に本丸跡にあった桂城小学校が水門町へ移転し、本丸跡は昭和31年(1956)10月に桂城公園として利用が開始された。

桂城公園として整備されて以降、本丸跡は行事や賑わいの拠点となり、秋田犬本部展覧会が毎年春に開催され、全国から大勢の会員が自慢の秋田犬を連れて桂城公園を訪れている。



大館城本丸跡の桂城公園

おうろかん ②桜櫓館

さくらぼんぞう
旧大館町長を務めた桜場文蔵氏は、秋田犬保存会の第3代と第6代の会長を通算14年務め、秋田犬保存会の礎を築き、秋田犬の発展に大きく寄与した。

昭和8年(1933)築造の桜櫓館は、桂城公園の西側に近接し、平成11年(1999)に国の有形文化財に登録された個人所有の建造物である。桜場氏の私邸であり、市街地が大火に見舞われた際に、奇跡的に残った昭和初期の貴重な木造建築である。四方にガラス窓を配した展望台は、2階の屋根から突き出るように見える特徴を持つ。

なりたきんじ
現在の所有者である成田欽治氏の尽力により大事に保全、公開され、展示会などに利用されている。



天然秋田杉や樺の床板を用いた桜櫓館

③侍屋敷跡に残る泉家の住宅

秋田犬保存会の初代会長を務め、昭和元年(1926)から昭和5年(1930)まで大館町長を務めたいずみ
泉
しげいえ
茂家氏の住宅が今も大切に保全されている。

建物は明治時代に建造され、大館八幡神社と大館城本丸跡を結ぶ中間に位置している。

愛犬家の泉氏は、秋田犬の純血種探索と種族保存に熱心に取り組み、秋田犬保存会結成の中心となり、国の天然記念物指定に大きく貢献された。



秋田犬保存会の礎を築いた泉氏の住宅

④侍屋敷跡に残る木村家の住宅

実業家の木村泰治きむらたいじ氏は、大館駅前おほのくさきの忠犬ハチ公像建立に貢献され、またブロンズ像を宮中へ献上されるなど、秋田犬の保存と発展に多大な支援をされた。

同氏が、大正6年(1917)に建造した住宅は、後年に母屋の内部を改修したが、離れは概ね当時のままの姿で、大事に子孫が保存している。

住宅には、宮家が滞在された記録も残されており、由緒ある和風の佇まいを大切に守っている。



秋田犬とゆかりの深い木村家の住宅

⑤秋田犬の像

市内には秋田犬の像がたくさんあり、中でも代表的な像は、昭和39年(1964)5月に忠犬ハチ公の若い頃の姿を表現した大館駅前おほのくさきの「秋田犬群像」である。

大館駅前には、これより先に「忠犬ハチ公銅像」が昭和10年(1935)建立されたが、戦時の金属回収で昭和20年(1945)に供出後、関係者の努力により昭和62年(1987)に再建された。

なお、昭和10年(1935)建立の「忠犬ハチ公銅像」の台座は、その後桜場文蔵邸さくらばぶんざうで保存後、昭和53年(1978)に台座のみ秋田犬会館前へ移設された。

月日は流れ、風雪にさらされていた主なき台座へ、2代目ハチ公を蘇らせた人々の思いが高まり、平成16年(2004)に「望郷のハチ公像」として60年ぶりに秋田犬会館前の広場へ建立された。

また、大館八幡神社おほのくさきには狛犬とは別に、昭和14年(1939)9月建立の秋田犬の石像があり、堂々とした姿で出迎えてくれる。この石像は、明治の戌年いぬとし生まれの有志によって1対建立されたものである。



大館駅前おほのくさきの「秋田犬群像」



大館八幡神社おほのくさきの秋田犬の石像

⑥秋田犬の像の分布図

大館発祥の秋田犬は、市民に愛され市のシンボルとなっており、市内のあちこちで秋田犬の像を見かけることができる。秋田犬はもちろんであるが、その像に対する市民の思いはとて深い。

市民の力でハチ公の生家へ建立した「生誕地碑」と「ハチ公ふるさとガイドモニュメント」は、郷土の誇りを市民や関係者が熱意を込めて表現した賜物である。



秋田犬の像の分布図 (地図：出典国土地理院)

(5) まとめ

秋田犬が、飼い主と一緒に郊外や河川敷を散歩する風景は、飼い主と秋田犬の関係が猟犬から番犬、パートナーと役割が変化しつつも、大館の原風景として残っている。

大館城跡での開催が続いている「本部展覧会」をはじめ、大館アメッコ市、きりたんぼまつりなど大館を代表するイベントやお祭りに秋田犬は欠かせない存在になった。また、市内のいたるところにみられる秋田犬の像やデザインは、秋田犬に対する大館市民の愛情が表れたものである。

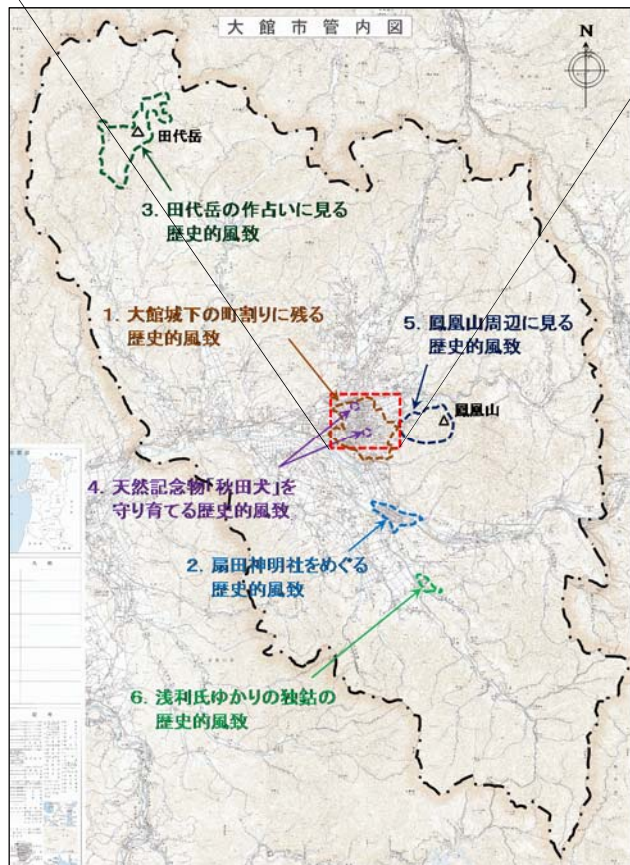
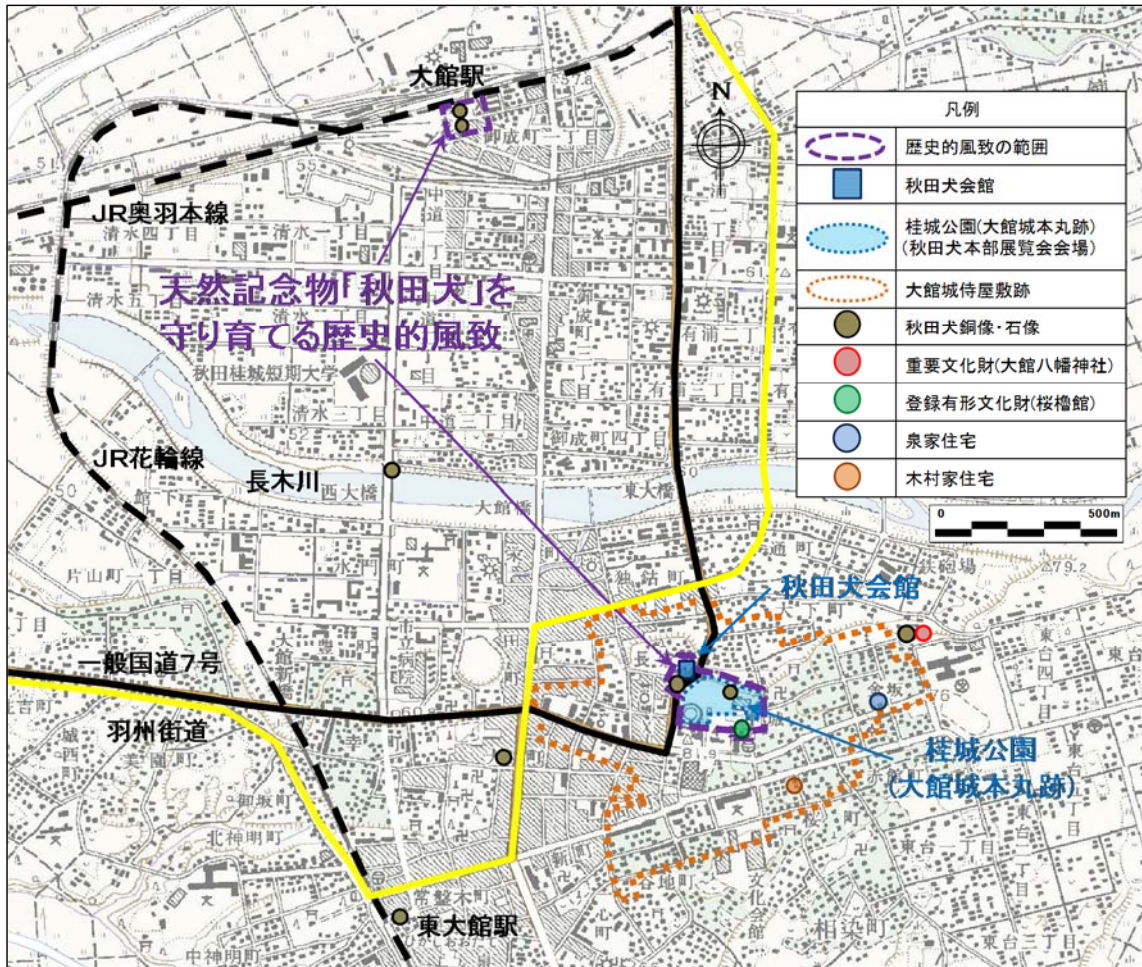
先人が、秋田犬の種の保存や銅像・石像に深い愛情を注ぎ、守り育ててきた活動が、人と犬との深いきずなとなって、良好な歴史的風致を形成している。



アメッコ市会場の「秋田犬」



きりたんぼまつり会場の「秋田犬」



拡大図(上:大館駅周辺、下:桂城公園周辺)

天然記念物「秋田犬」を守り育てる歴史的風致の範囲 (地図: 出典国土地理院)

【コラム】^{あきたいぬ}秋田犬をはじめとした犬と人々の営み

①忠犬「ハチ公」の物語

○ハチの生誕地は大館市

ハチは大正12年(1923)11月に、秋田県北秋田郡二井田^{にいだ}村(現大館市)^{おおしない}大子内の豪農である齋藤義一^{さいとうぎいち}宅で生まれた。年が明けて大正13年(1924)1月に大館駅から東京渋谷駅へ送り出され、東京帝国大学(現東京大学)農学部教授^{うえのひでさぶろう}の上野英三郎博士のもとで愛育され、「ハチ」と命名された。

そして、上野博士が出勤の際には、いつも渋谷駅まで随伴するのを常とした。残念なことに、大正14年(1925)5月に上野博士が急逝されたが、その後もハチは故人を慕って毎日決まった時間に渋谷駅前に佇んで、主人の帰りを待ち続けた。

ハチが、広く知れ渡るようになったのは、日本犬の純血保存に努めていた犬の研究家である齋藤弘吉^{さいとうひろきち}氏が、「朝日新聞」に投稿し、昭和7年(1932)10月4日付朝刊に「いとしや老犬物語、今は亡き主人の帰りを待ちかねる7年間」という見出しに写真入りで報ぜられてからである。

○ハチと人々の営み

昭和9年(1934)4月に、大勢の方々の寄付により渋谷駅前にハチの銅像が建立された。また並行して大館でも、ハチの銅像建立の運動が生まれた。

ハチは、故郷での銅像除幕を待たず、昭和10年(1935)3月7日から翌8日にかけて亡くなったが、当時の国鉄から大館駅の用地使用許可がおりたのが、奇しくも同年3月7日であり、同月12日に市民80人が当市の蓮^{れんしょうじ}荘寺^{ついでうかい}に参列し追悼会が催された。

その後、昭和10年(1935)7月に大館駅前へ建立されたハチ公の銅像除幕式には、故上野博士夫人やハチ生前の渋谷駅長であった吉川氏をはじめ、千人もの市民が参列しハチを偲んだ。

昨今では、ハチ公没後80年にあたる平成27年(2015)3月8日に、「ハチ公と上野英三郎博士の像を東大に作る会」の方々や関係者の尽力により、上野博士が教鞭をとられた東京大学農学部正門の右側に、銅像が建立され除幕式が行われた。小雨の中、数百人の方々がハチと上野博士の90年ぶりの再会を祝福し「上野博士とハチ公の対面した銅像」は、「人と動物の相互敬愛の象徴」となっている。



晩年のハチ



国立科学博物館のハチ公の剥製



上野英三郎博士とハチ公の銅像

ろうけん
②老犬神社を基軸とした人々の営み

老犬神社は、大館市葛原地区(旧南部藩に接した旧秋田藩の東側)の山腹にある。社殿は昭和11年(1936)7月18日未明の火災で焼失したが、その後改築し、現在も毎年例祭が行われている。

宵宮祭は4月16日、本宮祭が4月17日に開かれ、国土の天変地異を鎮め、五穀豊穡、家内安全、交通安全などを祈願し、本宮祭は一般の方も見学できる。

また老犬神社には、古くから猟師のさだろく ひだろく定六(左多六)と、その飼犬シロの悲話が地域に伝えられ、その物語に登場する「シロ」が祀られている。

物語は数説あるが、不幸な死を遂げた主人定六(左多六)を慕う猟犬シロを忍び、祟りを鎮めるため山腹へ神社を建立し祀ったと伝えられている。

そして地域の人々は、永くこの悲話を伝え、今も「シロ」への愛情を守り続けている。

また、老犬神社は秋田犬保存会との交流も深く、社殿の隣には関係者の石碑が建立されている。



秋田杉に囲まれた「老犬神社」



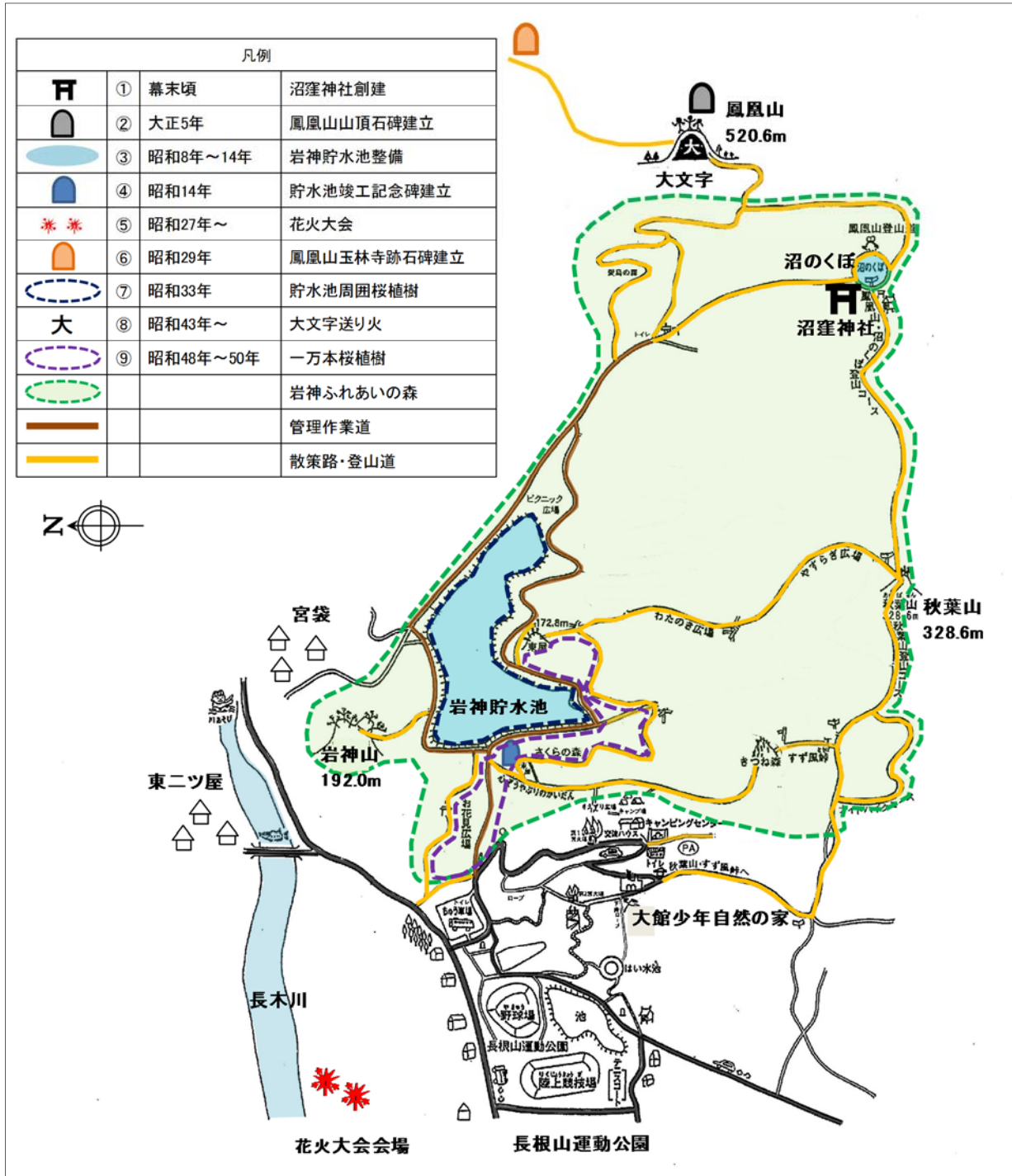
再建された「老犬神社」



老犬神社内の秋田犬と地域の人々

5. 鳳凰山周辺に見る歴史的風致

鳳凰山(標高 520.6m)は、大館市中心部の東側に位置し、市民の暮らしが息づく大館盆地を見守っている。麓には岩神ふれあいの森、岩神貯水池があり、岩神沢の上流部に位置する鳳凰山と秋葉山の鞍部には、沼窪神社が建立されており、鳳凰山を背景に伝統行事や市民の活動が続いている。



鳳凰山周辺位置図 (資料：大館少年自然の家)

(1) 岩神貯水池周辺に見る人々の活動

① 岩神貯水池の築造

昭和初期、大館町^{おおだて}と長木村^{ながき}、釈迦内村^{しゃかない}の1町2村は、秋田県へ長木川の水不足を補う要望を重ね、昭和8年(1933)に鳳凰山の麓へ岩神貯水池を築造する工事が始まった。

当時は、土木機械が少なく、工事の人数は延べ15万人以上におよび、莫大な労働力を費やして、昭和14年(1939)に岩神貯水池は無事完成した。岩神貯水池の堤防の近くには、竣工を記念して、地元の1町2村の関係者の名を記した記念碑が建立されている。

貯水池の規模は、長さ130m、高さ23.3m、外周約3kmに渡り、下部内部に波止めの石を張り土堤を築いた。貯水池は665,000 m³の水を貯え、その完成により277haの農地が恩恵を受けるようになった。

昭和42年(1967)には「大規模老朽溜池整備事業」に着手後、昭和44年(1969)に完成し現在に至る。その後受益地の宅地化が進んだものの、現在でも約120haの農地へ利用されている。

岩神貯水池は、農業用水の安定供給を主目的に整備されたが、水は地域の防火や融雪にも利用され、周辺は樹木と一体となった景観を形成し、多くの市民が散策などを楽しんでいる。



岩神貯水池竣工記念式(昭和14年)



竣工記念碑

② 岩神貯水池周辺の環境づくり

貯水池が完成した昭和14年(1939)から地元水利組合が中心となって維持管理しており、現在は、大館市土地改良区が水門開閉、用排水の調整、貯水池の漏水調査、老朽化した施設の点検・修理などを行っている。また堤の草刈りや貯水池周辺の刈り払い、清掃など、通年の維持管理作業は、受益農家と一緒に続けている。

貯水池周辺の維持管理は、大館自然の会や地域住民、散策者の支援を得て、地元商工会議所や地域の森林組合などが主体となって桜の管理、風雪による倒木処理、散策路の草刈りを続けている。



散策路の草刈作業

緑化活動は、岩神貯水池の工事が始まって間もなくの昭和 11 年(1936)に岩神貯水池の周辺に桜を植樹した記録があり、昭和 33 年(1958)には、市民の参加でソメイヨシノを植樹している。これらが桜を植える活動の始まりである。

桜を植える活動はその後も続き、昭和 48 年(1973)から昭和 50 年(1975)の 3 年間で、岩神貯水池周辺の約 30ha に 22 種、合計一万本の桜を植樹する活動を展開した。



一万本桜の植樹活動(昭和 49 年)

この活動には、市民有志や婦人会をはじめ諸団体、中学生など市民総参加の協力があり、そのおかげで念願の「一万本桜」を植樹することができた。

こうして岩神貯水池周辺の緑化が進むにつれて、次第に散策する市民が増え、この地に対する市民の愛着が深まっている。その後も地元企業や観光協会、各種団体による八重桜などの植樹活動が続いている。

岩神貯水池の周辺は、地盤が固く植樹した桜が根付きにくい場所もあったが、厳しい自然環境に耐えた桜が今もたくさん残り、岩神ふれあいの森と呼ばれるようになった。

毎年 4 月下旬から 5 月下旬までは、様々な品種の桜が次々と咲き続け、秋になると紅葉と萩、初冬の 10 月に咲く桜もあり、四季折々の美しさを観賞することができる。

現在では、岩神ふれあいの森に咲く桜は、東北の桜の名所を集めた「東北・夢の桜街道～復興への祈りを捧げる桜の札所・八十八カ所巡り～」の第七十七番札所に選出されている。



岩神ふれあいの森の桜

ほうおうざん
(2) 鳳凰山を舞台とした人々の活動

① 鳳凰山の歴史

鳳凰山の山頂には、大正5年(1916)9月に建立された石碑があり、薬師大神と刻まれている。古くから地域の人々の健康を祈念する信仰碑である。この石碑には、建立者館林信三他、世話人田中徳右衛門の名が刻まれている。

大館地方で、「鳳凰山」の名称が使われた最も古い記録は、「玉林寺」の山号「鳳凰山玉林寺」である。鳳凰山の名称の由来は2説あり、浅利氏がこの地方を治めていた時代に、浅利氏の祖である甲斐の国の「甲斐鳳凰山」とのかかわりで、当時から鳳凰山と呼ばれていたという説と、この山の麓に「鳳凰山玉林寺」を建立したので、以後鳳凰山と呼ぶようになったという説である。



鳳凰山山頂の石碑

② 鳳凰山に見る市民の活動

鳳凰山を背景とした花火大会は、昭和27年(1952)に大館商工会議所主催で開催したのが始まりであり、長木川の下町橋上流で、1,800発の花火が打ち上げられた。

その後も、毎年開催してきた花火大会は、昭和43年(1968)から大文字送り火(大文字焼き)に合わせて開催されるようになり、昭和48年(1973)には小学生のスクールバンドによる演奏や、大文字踊りが加わり、その後燈籠流しや郷土芸能も披露されるようになった。

鳳凰山の大文字送り火(大文字焼き)は、物故者の慰霊と市民の無事息災を願う行事として昭和42年(1967)から調査や準備が行われ、昭和43年(1968)の夏に始まり、現在まで毎年開催されている。

点火作業は、麓の茂内地区住民が中心となって行ってきたが、近年はボランティアの市民が広く参加するようになり、当日は100名以上の市民が鳳凰山に登る。



花火大会に集う市民
(昭和28年)



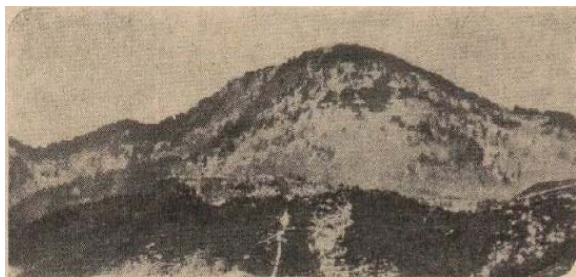
長木川から眺める花火
(昭和28年)



一斉点火作業

本市の「大」の字の大きさは、1画目の「一」の長さが120m、2画目の「ノ」の長さが180m、3画目の「丶」の長さが150mの合計450mであり、日本一の大きさを誇る。

また大の字の形を整えるため、毎年熱心に手入れを施してきた市民や関係者は、大館の大文字の美しさは日本一と自負しており、後世へ継承する思いを共有している。



早春の鳳凰山(昭和43年)



点火前日の鳳凰山(昭和43年)

「大館山岳会」主催の元旦登山は、会員が昭和38年(1963)に登山したのが始まりで、昭和48年(1973)からは本格的に大館山岳会主催事業として続いている。毎年約100名の登山者がご来光を拝んで、自身や家族の健康を祈願し、互いの飛躍を誓い合ってきた。

また、市民は古くから「鳳凰の峰を登る秋の月」など、俳句や短歌で鳳凰山や岩神を数多く詠んでいる。さらに18世紀後半に宗福寺20世住職光岳泰謙の選といわれる「大館八景」や明治時代の文人が選んだ「館城新八景」、そして「平成の大館八景」には、「岩神秋月」や「岩神紅葉」、「鳳凰山の大文字」が紹介されている。小学校や中学校、高校の校歌や市民歌にも鳳凰山が歌われ、この山を愛する市民の想いが鳳凰山周辺で育まれてきた。



鳳凰山元旦登山(昭和56年)

(3) 沼窪神社に見る人々の活動

①沼窪神社の歴史

沼窪神社は、大館盆地の東側の鳳凰山と秋葉山の^{あんぶ}鞍部に位置している。長木郷土読本によると、沼窪神社の建立は江戸時代の末期とある。

現在の社殿は、地域の人々が長年浄財を貯え、さらに地域共有の財産である登山道脇の松の大木を売却して、昭和40年(1965)に再建したものである。

鞍部の窪地には、外周60mほどの沼がある。窪地の地盤が水を通しにくい地層を形成しているため、雨水や沢水が集まり沼になったものと考えられる。

沼窪神社は龍神様を祀っていて、沼の水源を守護しており、昔から雨乞いの場所として信仰を集めた。



沼窪神社

②沼窪神社の例祭に見る人々の営み

長木郷土読本によると沼窪神社の例祭は、社殿が建立された江戸時代末期から、毎年旧暦の3月25日に行われていた。

昔は、鳳凰山の麓の^{あずまふたつや}東二ツ屋と^{みやふくる}宮袋の地域でも、同じ日にそれぞれの地域の鎮守祭を行っていたため、参拝帰りの人々が沼窪神社の例祭に立ち寄るようになり、当時の長木村では、沼窪神社例祭の参拝者数が最も多かったという。

今でも、東二ツ屋と宮袋の地域の人々に信仰が継承され、例祭は江戸時代と変わらず毎年旧暦の3月25日に続けられている。この日は、朝から鳥居や参道、沼、神社、^{じんばしゃ}神馬社にしめ縄を飾り、神社の掃除、御神酒や御供え物などの準備をして、昼頃から神事が行われる。

かつては、山中に出店が立ち並び、^{でみせ}重箱と一升瓶を背負って急な山道を登ってくる参拝者の中には、^{かつの}鹿角市や県南部の人達の姿があり、数珠つなぎになった馬を連れた農家の一団も馬頭観音詣でにやって来て、人々は沼の周りをぐるりと囲んで一日中宴を続けたという。

また、神社のお賽銭とは別に沼の水面に紙で包んだお金を投じて、その浮き沈みによって吉凶を占う風習があり、地域では毎年舟で沼の底を清掃し、沼の水は飲めるほどに澄んでいたという。

平成の時代になって参拝者は減少したが、東二ツ屋と宮袋の地域の人々は、鳥居の再建やしめ縄の奉納などを行い、今も大切に沼窪神社を守り続けており、鳳凰山や秋葉山への登山の中継点としてここに立ち寄る市民も多い。沼窪神社の沼そのものが、御神体として雨乞いの信仰を集め、自然のままの樹木で囲まれた沼の風景は、神聖で独特な^{かも}佇まいを醸し出している。



沼窪神社の沼

(4) まとめ

鳳凰山の西に位置する岩神貯水池は、昭和8年(1933)から整備が始まり昭和14年(1939)に完成後、地域の水不足を補い農地を潤してきた。現在も貯水池の水は農業用水や生活用水へ利用され、地域住民による堤の除草や周辺の清掃活動が続いている。そして、岩神貯水池周辺の整備に合わせ、昭和11年(1936)から桜の植樹活動が続けられた結果、貯水池の周りは岩神ふれあいの森と呼ばれるようになり、今では鳳凰山周辺一帯に大勢の方々が訪れるようになった。

また、鳳凰山の西を流れる長木川で昭和27年(1952)から続いている花火大会や、昭和43年(1968)から続く鳳凰山大文字焼きは、市民にとって大事な夏の風景である。

さらに、鳳凰山の南西に位置する沼窪神社で江戸時代末期から行われている例祭は、今も東二ツ屋地区や宮袋地区の住民により大切に継承されている。

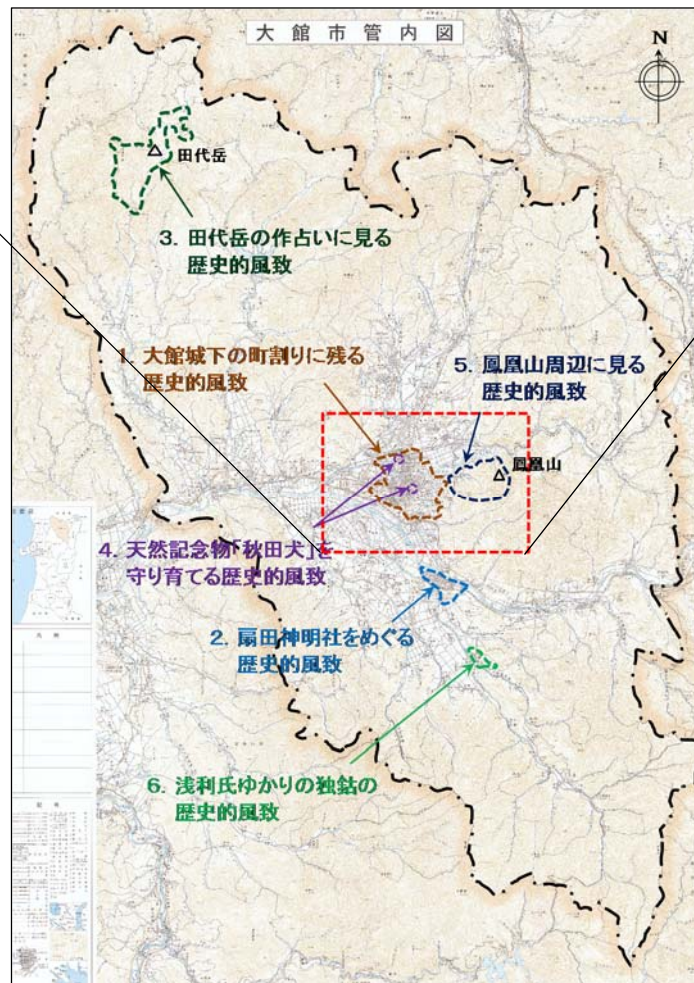
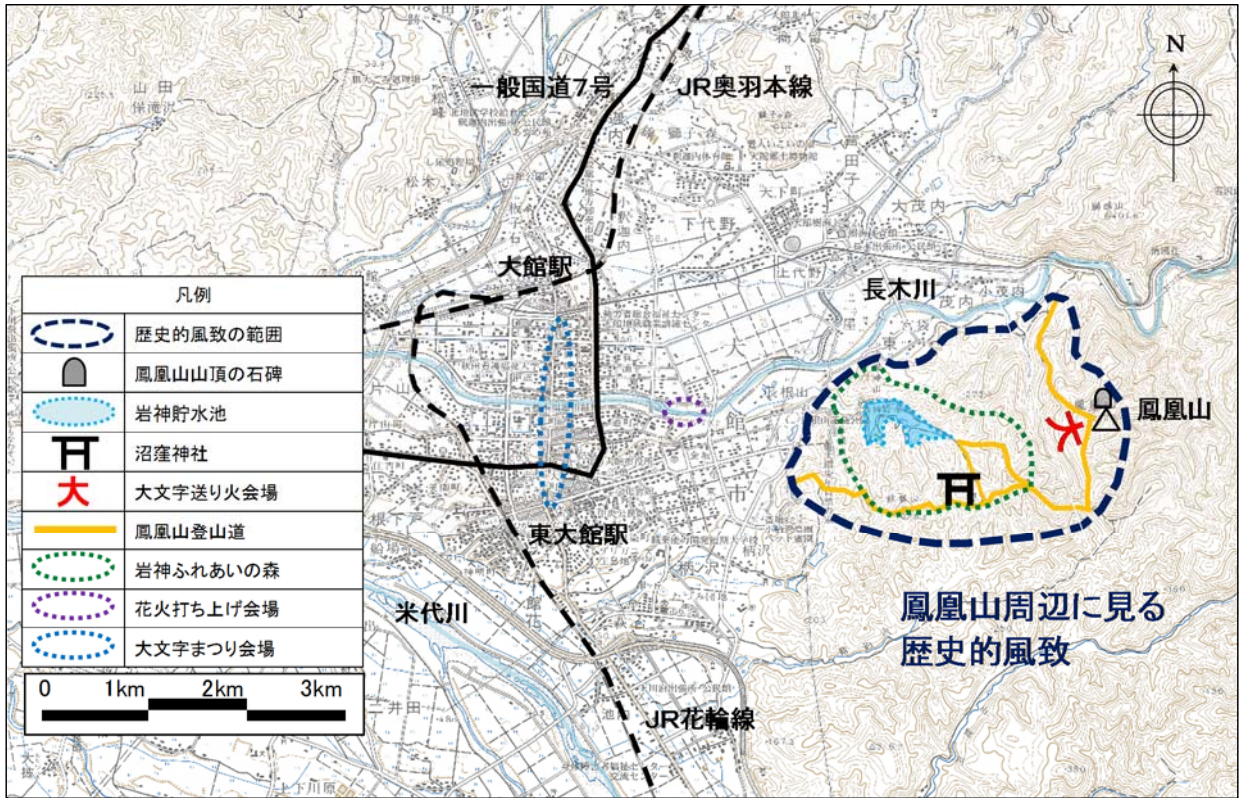
鳳凰山周辺における市民のこうした活動は、建造物や自然と一体となって良好な歴史的風致を形成している。



初秋の鳳凰山



長木川下流から見る冬の鳳凰山とJR花輪線



鳳凰山周辺に見る歴史的風致の範囲 (地図：出典国土地理院)

【コラム】

① 鳳凰山玉林寺跡の石碑と現在の玉林寺本堂

鳳凰山玉林寺跡の石碑は、曹洞宗^{そうとうしゅう} 鳳凰山玉林寺の25世重興大機亮^{だいきりょうせん} 仙大和尚が、昭和29年(1954)の9月9日に建立したものである。現在も、鳳凰山玉林寺跡の石碑を守るため、地域の方々が中心になって、石碑周辺の刈り払いを行い大事にしている。

鳳凰山玉林寺は、大永年間(1521～1527)に浅利^{のりより}則頼^{ほだじ}が久保田松原の補陀寺の9世草庵守瑞^{そうあんしゆずい}に帰依^{きえ}し、鳳凰山北側の麓へ建立したのが始まりである。

その後、鳳凰山玉林寺は浅利氏の本拠地である^{とっこ}独鈷に移されたが、浅利氏滅亡後、慶長17年(1612)に現在地の大館市字大館へ移転した。

近くには蓮荘寺^{れんしょうじ}、浄応寺^{じょうおうじ}、宗福寺^{そうふくじ}があり、今なお城下町の町割りが残るエリアである。

現在の本堂は、昭和6年(1931)に建立され、寺紋^{じもん}は浅利氏と同じ「雁金」であり、屋根などに飾られている。



鳳凰山の麓にある玉林寺跡の石碑



浅利家「雁金紋」



玉林寺の本堂

②山田記念ロードレース

大館^{ながねやま}長根山記念公園は、鳳凰山の西側に位置し、大正天皇の即位記念事業として、大正4年(1915)に約1万坪の平地を基に整備された。小学校の連合運動会や昭和12年(1937)の全日本スキー大会、戦後の国際ジャンプ大会などが開催され当市のスポーツ振興の拠点であった。

昭和46年(1971)からは、「長根山運動公園」として総合的な運動施設の整備が図られ、陸上競技や野球、テニスなどの大会が盛んに開催されている。

中でも、山田記念ロードレースは、昭和28年(1953)4月20日の第57回ボストンマラソン大会において、当時の世界新記録で優勝した当市出身の山田敬蔵^{やまだけいぞう}選手(大館市名誉市民)を讃え、その偉業を記念し、昭和28年(1953)から開催されてきた。道路事情や競技の安全上、走路に変遷はあったものの、長根山陸上競技場を中心にランナーは、鳳凰山に見守られながら走っている。

関東に在住の山田さんは、平成21年(2009)7月、81歳でフルマラソンからの引退を表明された後も、招待選手として平成24年(2012)の第60回大会まで健脚を示され、大館市民へ力強い激励をいただいた。毎年大勢の市民が運営に携わり、沿道からランナーを応援している。



第1回山田敬蔵記念 北日本マラソン大会(昭和28年5月20日)

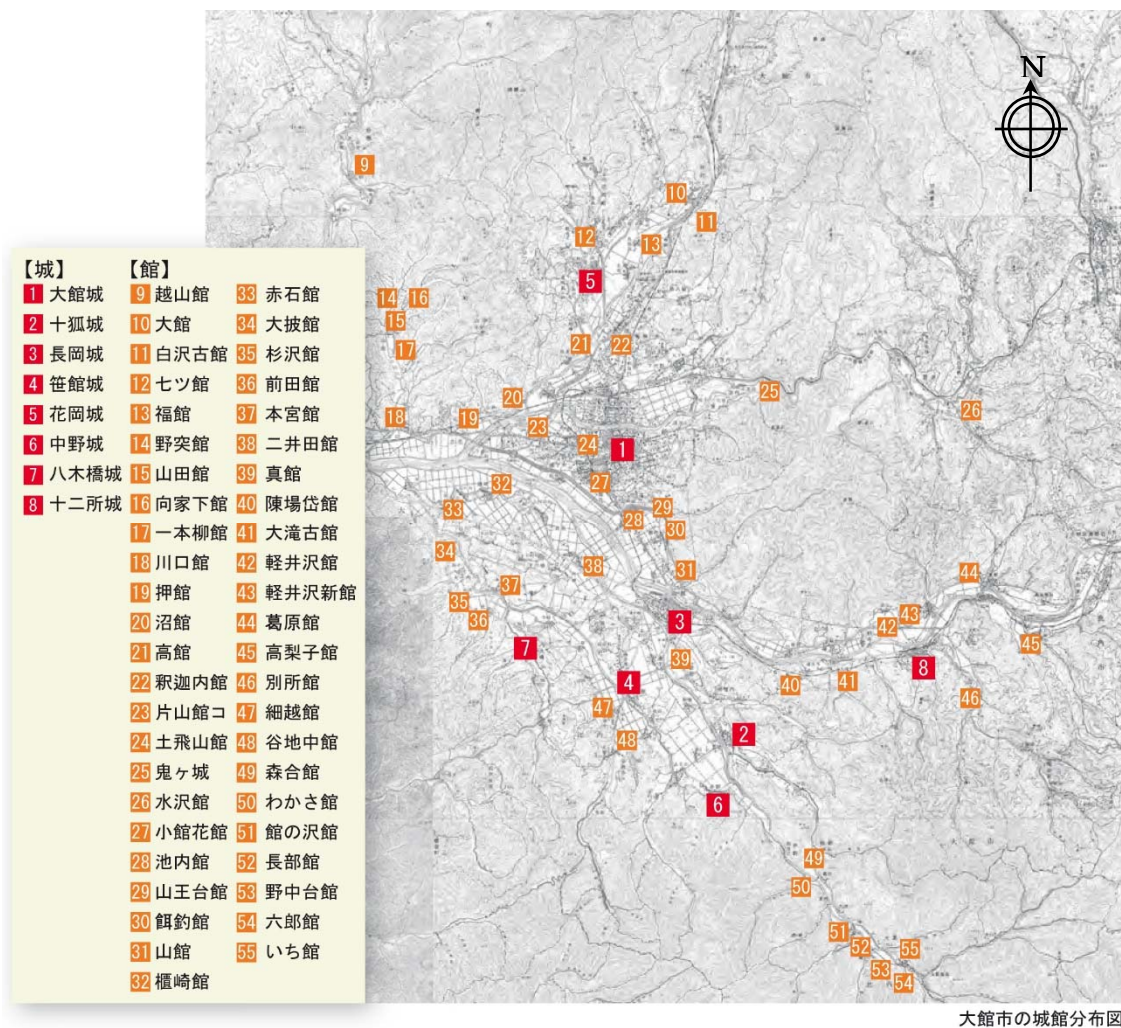
6. 浅利氏ゆかりの独鈷の歴史的風致

独鈷には、16世紀に浅利則頼が再建した大日堂(現社殿は17世紀再建)のほか、独鈷囃子や諏訪八幡神社など浅利氏が残した歴史的資産がある。独鈷囃子保存会が独鈷囃子を伝承し、独青团(地元青年の団体)が諏訪八幡神社や諏訪の松様の祭祀を続けるなど、地域の人々によって大切に保存されている。

(1) 大館地方と浅利氏

永正15年(1518)大館地方に移った清和源氏義光流の浅利則頼が最初に築城したのが十狐城である。則頼は、独鈷を本拠地として大館地方各地に城館を築き、家臣団を配し、城館を拠点に開墾開発を進めて「前田」と呼ばれる広大な田園を作り上げ、この地方に近世の礎を築いた。

則頼以前に明確にこの地方を統治した人物は知られておらず、その後の支配者たちの本拠地も、この地方に置かれることがなかったため、則頼及び浅利氏は、最初で唯一の殿様として、この地方の人々から深く敬愛されている。



大館市の城館分布図

大館地方に広く残る城館跡 (地図：出典国土地理院)

とっこだいにち とっこばやし
(2) 独鈷大日神社と独鈷囃子

①大日神社

大日神社は、大永2年(1522)浅利氏と南部氏なんぶとの戦いで破壊されたものを、同6年(1526)十狐城主浅利則頼が五間四面のお堂に改築し、その後浅利家の氏神となった。

現在のお堂は、寛文12年(1672)に十二所城しおのやしげつな代塩谷重綱が再建したもので、大正14年(1925)に神殿を、昭和33年(1958)に幣殿を増築して現在に至っている。

伝承によると神亀2年(725)創建、例祭は毎年旧暦の5月28日、本尊だいにちによらいは大日如来である。僧行基そうぎょうきが1本の桂の木から3体の大日如来像を刻み、ここ独鈷のほか鹿角市の小豆沢、長牛の3カ所の大日堂に奉置たとされている。その3体のうち小豆沢と長牛の2体は焼失しており、独鈷にのみ現存する。江戸時代までは、大日堂と称して神仏混交の形態をとっていたが、明治に入り神明社となり、本尊大日如来は、主祭神大日靈貴命おおひるめむちのみこととなった。その後、平成元年(1989)に社名を大日神社と改めた。

旧5月27日、宵宮は午前9時の鎮火祭から始まる。4人の神職が独鈷の各家々を回り水と塩でお清めをする。その後午後5時に宵宮祭が行われ、神事後、後述する独鈷囃子けんばやし(剣囃子)が奉納される。

旧5月28日、例祭は午前11時に行われる。開扉かいひの儀、献饌けんせんの儀の後祝詞のりとが奏上され、袴たまくしを付けた役員が玉串ほうてんを奉奠する。一連の神事が滞りなく終了すると、前庭で湯立ゆたての儀が行われる。湯立は当年の米の作況を占うもので、鉄の大鍋に沸騰させたお湯を神職がわら束でかき混ぜ、泡の量や大きさなどを見て豊凶や病害虫の発生について判断するものである。

菅江真澄すがえますみが歌に詠んだ浅利則頼遺愛いあいの『琵琶びわ』など9件の市指定文化財を有する。

また、牛の絵馬が多数奉納されていることでも有名である。



独鈷大日神社



例祭



湯立の儀



安永8年(1779)奉納の牛の絵馬



浅利則頼遺愛の琵琶

②独鈷囃子（市指定無形民俗文化財）

永正15年(1518)に十狐城を築いた浅利則頼が、十狐城完成を祝う酒宴の席で自ら剣を取り舞ったのが剣囃子である。則頼はこの喜びを後世まで伝えるよう城内の女性に銀扇ぎんせんを与え踊らせたとされており、これが独鈷囃子の始まりである。

その後一時廃れていたが安政年間(1854～1859)独若組どくわかくみ(現独青団どくせいだん)によって復活した。古い記録は失われているが、昭和39年(1964)独青団事業計画の中に「氏神祭典事業囃山挙行」などが見られる。

独特の調子と踊り、長い伝統が評価され、平成12年(2000)12月6日比内町の無形民俗文化財に指定され、平成17年(2005)市町村合併により大館市の無形民俗文化財となった。



独鈷囃子 山車の様子

現在伝わるのは次の四つの囃子である。

よ 寄せ囃子	この旋律は笛の吹き手に任されており、神が宿るとく心のままに吹かれる音に、太鼓がそれに合わせ次第に盛り上がっていく囃子である。
ほん 本囃子	これは山車が移動する際の囃子で、リズムがスローダウンし、ゆったりと山車が動くイメージである。踊り付。
けん 剣囃子	古風な調子の囃子で、町内の要所ごとに山車が停車し、踊りを披露する。
やま 帰り山車	神社に帰るときの軽快な調子の囃子である。

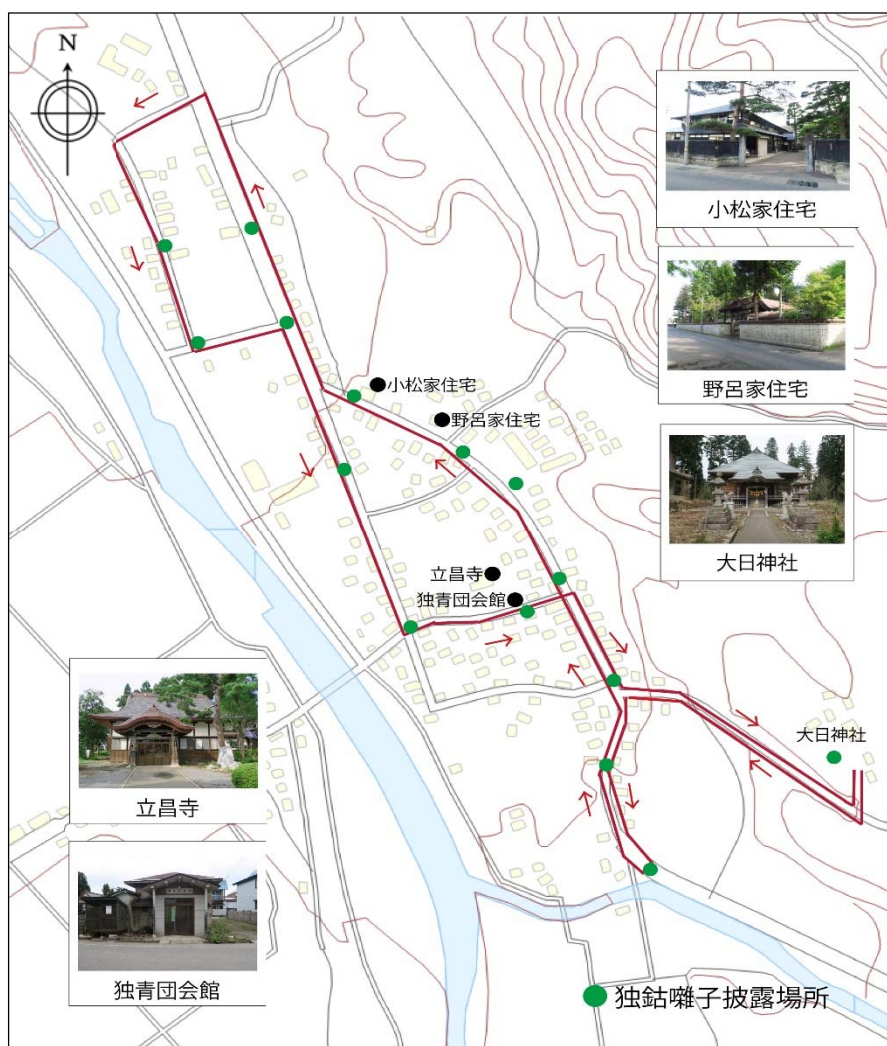
囃子方は、笛(4調子の7穴)・太鼓(大・小)・三味線・鉦鼓しょうこ。

大日神社例祭の宵宮午後6時、保存会会長以下が本殿でお祓いを受け、本殿前で剣囃子が奉納される。奉納が終わると神主から金御幣きんごへいを頂戴し、浅利家の家紋である雁金かりがねの提灯を軒下にぐるりと廻した山車にその金御幣を飾って町内へ出発となる。古くは山車の下を踊り手と囃子方が歩いて回ったが、現在とともに自動車に引かれる山車に乗るようになった。



奉納される独鉦囃子

山車に乗る踊り手は主に女子小学生で、白鉢巻きを向うに結び、紺地に白く雁金を染め抜いたはんでん袴纏を着て橙色の扇子を持つ。囃子方は独鉦囃子保存会の面々で、橙地に白く雁金を染め抜いた袴纏に、同じく白の向う鉢巻きである。山車の運行は、白地に赤い「独若」の文字の袴纏を着た独青团が担当している。



独鉦囃子山車巡行図 (地図：出典国土地理院)

寄せ囃子や本囃子で運行された山車は町内十数カ所に止まり、剣囃子が披露される。人々は門口に出て山車を迎え、にぎやかな祭をたのしむ。

独鈷囃子山車の順路には、次のような歴史的建造物がある。

出発地点は大日神社、現社殿は寛文12年(1672)の建築。大日神社の高台から住宅地へ下りていくと、曹洞宗の寺院立昌寺(明治築)があり、野呂家住宅(明治築)がある。野呂家は、甲斐より浅利則頼したがに随って来た旧家で「甲斐国より召し連れ候家臣」の筆頭にあり、初代は野呂さいまのすけ左馬之助。当代も同名である。その隣には小松家住宅(明治築)がある。小松家は、江戸時代肝煎を務めた旧家で、近世の資料が数多く残されている。最後に剣囃子が披露されるのは、独青团会館(昭和4年(1929)築)。後述する独青团の会館である。

そして、ひと通り町内を回った山車は、帰り山車の軽快な囃子で神社へと帰っていく。

初夏の夕刻、賑やかに照明をつけた山車が、♪ヨーイヨイ・ソレ・イヤサカサッサーと練り歩く姿は、農作業が一段落した地域の長閑さのどかを象徴する風景であり、大日神社前で奉納される剣囃子は、先人の偉業と地域の歴史を思い起こさせる、郷土の宝である。

③独鈷囃子保存会

独鈷囃子保存会は昭和56年(1981)に結成された。保存会結成以前の独鈷囃子は、民謡を主体とした芸能愛好家の団体が伝承していた。この団体は、大日神社例祭はもちろん、隣村や大館、扇田、大滝など近郷の祭典に招かれては披露し、花見会やたんぼ会などにも呼ばれて喜ばれていたが、無形民俗文化財として保存していこうとの機運が高まり、保存会として結成されたものである。大日神社に隣接する大館市民舞伝習館みんぶでんしゅうかんを稽古の場と



独鈷囃子保存会の練習風景

して、地域の子供たちに伝える活動が続けるほか、学校や地域の文化祭、運動会、老人ホームの慰問、比内とりの市など様々な場面で披露されている。最盛期は大人20名子ども20名、計40名以上の会員を擁し、例祭に山車を2台出すほどであったが、少子高齢化さんげんの中で漸減している。

近年は、地元の東館ひがしたて小学校もふるさとキャリア教育の一環として独鈷囃子に取り組み、正課クラブなどでその継承に努めている。

また、秋田県の民俗文化財公開交流事業など、発表の機会をとらえて、独鈷囃子の普及に努めている。



民俗文化財公開交流事業の様子

(3) 浅利氏の歴史的資産と独青团

① 浅利氏ゆかりの歴史的資産

大館地方の歴史上、明らかに独立領主として勢力を保っていたと言えるのは浅利氏である。東の南部氏や西の秋田氏と争い、最盛期の支配圏は現在の大館地方をこえていたが、本拠地の十狐城を構えていたのは独鈷であった。独鈷の人々が昔を思い、自らの源流を考えるとそこには浅利氏がいて、アイディンティティを構成する重要な要素となっている。

16世紀、浅利氏が活躍した時代、大館地方の中心地である独鈷を通る本道は、大日神社の高台を通っていた。北の扇田から独鈷を通って大葛へ行く場合、扇田から横沢よこさわを通して味噌内みそないに入り、僧行基じゆずがけの伝説が残る珠数掛じゆずがけの地を通って山中を進み、この高台に着いた。大日神社からはこのまま高台を進んで沢村さわむらに降りて、大葛に向かっていた。この道沿いには、十狐城主浅利氏ゆかりの以下のような場所が点在しており、歴史の道となっている。

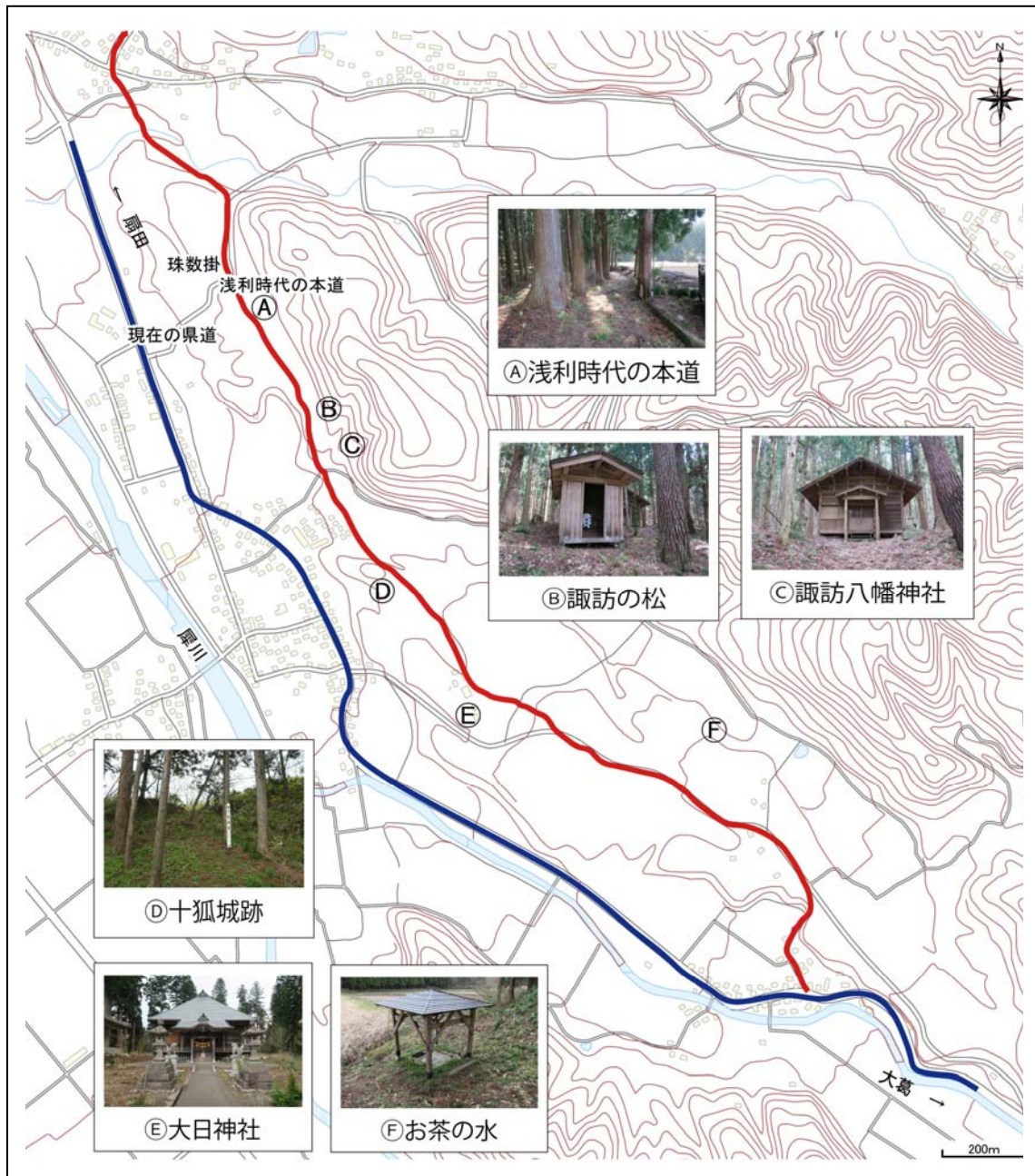
136頁の図中④は浅利時代の本道とされている。写真は珠数掛の地から南を見る。現在は軽トラックがようやく通れる程度の細い道となっている。

珠数掛から南下すると左手にしめ縄をした松と祠ほこら(昭和・戦後築)がある。⑤諏訪の松である。諏訪八幡神社の脇に立っていて、初代は珍しい四葉の松であったが、暴風のため明治24年(1891)8月12日に倒れ、現在立っているのは2代目である。初代の諏訪の松は倒れた際血を噴いたと言われる。その初代は2本の丸太として残っており同年11月30日元の位置に祠を建てて1本、大日神社の長床に1本祀られている。柳田国男の『日本の昔話』に「松子の伊勢参り」として登場する。独青团が「諏訪の松様」として管理しており、毎年、春に例祭を行っている。

諏訪の松の隣には、⑥諏訪八幡神社(現社殿 明治38年(1905)築)がある。浅利則頼が十狐城築城の際に城の鎮守として勧請かんじょうした。独青团が管理しており、毎年、秋に例祭を行っている。

さらに南下すると⑩十狐城跡(築城 永正 15 年(1518))があって、現在は当時の堀切が残っている。十狐城は浅利氏の本拠地で、舌状台地に空掘りを配し四郭からなる。現在は畑などになっているが、独青团が通路などの草刈りをしている。十狐城の南には⑪大日神社(現社殿 寛文 12 年(1672)築)がある。浅利氏入部以前からあったとされているが、浅利則頼が再建(大永 6 年(1526))後に浅利氏の氏神となった。ここでも、独青团が境内の草刈りをしている。

本道から少し離れ、北側の沢に降りると⑫お茶の水(言い伝えによると 16 世紀築造)がある。中世の八角石造りの井戸で、浅利氏がお茶の水を汲んだとも、姫君が身を投げたとも伝えられる。ここもまた、独青团が草刈りをしている。



浅利氏ゆかりの歴史的資産 (地図：出典国土地理院)

②独青团の歴史と活動

独青团は、独鈷本村在住の青年により構成される団体である。

創立は明和年間(1764～1771)と言われており、慶応2年(1866)には、独若組として諏訪八幡神社に唐獅子舞を奉納したとの記録がある。明治40年(1907)初めて規約を制定して独若連どくわかれんちゅう中と称し、大正8年(1919)規約を改正して独青团となった。大正5年(1916)に結成された官制の青年団とは一線を画し、諸社の祭典、盆踊り、自警団など独自の事業を展開した。その多くは一部形を変えながらも現在まで続いている。

昭和4年(1929)国有林の下刈りで得た賃金などをもとに会館を新築した。その後昭和35年(1960)外壁をモルタルで補強するなどしたものが現在の会館である。

明治時代の独若組の組織は、若者頭わかものがしら、蔵元くらもと(会計係)、箱元はこもと(庶務係)、伍長ごちょう、こぼしりこぼしり小走で構成され、主な行事としては、神明社(現大日神社)祭典時の余興、神明社以外の諸社の祭典主権むしお、虫追い、盆踊り、風紀取り締まりなどとなっている。

現在の独青团は、団長、副団長、会計係、総務係しやむ、社務係、会館係、街灯係で構成され、年1回の総会のほか、独鈷囃子の運行、諏訪八幡神社など浅利ゆかりの諸社の管理と祭典の主権、盆踊り、大日神社などの草刈り、街灯やカーブミラーの管理を行っている。明治時代と比べると、虫追いが無くなったことと、風紀取り締まりの代わりに街灯管理を行っていることなどが違いとなっている。

独青团は100年以上にわたって、独鈷囃子の山車の運行を担当し、諏訪八幡神社などの管理をし、社殿が壊れれば修理又は改築し、鳥居が倒れれば自分たちの山から木を切り出して再建奉納し、浅利氏が開いた郷土の文化と風景を守り続けてきたのである。



独青团会館



鳥居を設置する団員



早朝大日神社境内を刈払いする団員



お茶の水の保存作業をする独青団員



歴史の道の刈払いをする独青団員

(4) まとめ

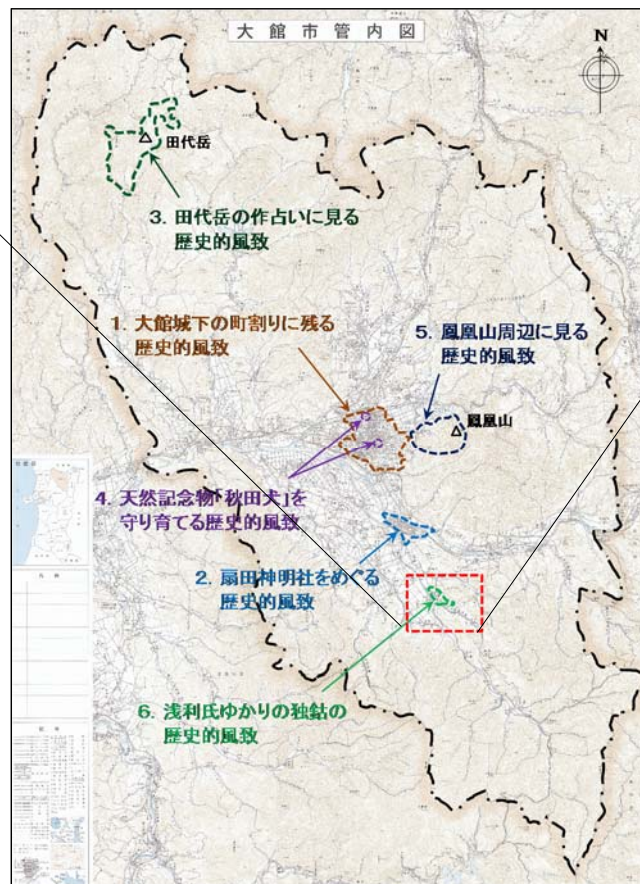
独鈷の人々は、かつて独鈷が大館地方の中心地であったことを誇りとしており、独鈷を中心地たらしめた浅利則頼をたいへん尊敬している。浅利氏に代わって、秋田氏や佐竹氏の支配を受けることになってもなお、浅利氏を敬愛し続け、独鈷囃子や浅利氏ゆかりの歴史的資産を守り続けてきた。

伝承 1500 年前創建の大日神社に、500 年前の独鈷囃子が奉納され、同じく 500 年前に甲斐から浅利則頼に随従してきた家臣の家々を廻る景色と、それを伝承する独鈷囃子

保存会の活動。同じく 500 年前の浅利氏の歴史的資産を守る、250 年の歴史を持つ独青団の活動。これらは、後世に伝えていかなければならない、大切な大館市の歴史的風致である。



囃子山奉納時の独青団と独鈷囃子保存会の面々
前列中央の礼服姿が独青団団長



浅利氏ゆかりの独鈷の歴史的風致の範囲 (地図：出典国土地理院)

【コラム】

○ダンブリ長者伝説と大日堂

古伝承によれば、大日堂は第26代継体天皇の建立と伝えられている。

この地方に伝わる「ダンブリ長者」伝説によると、長者となった夫婦の娘、吉祥姫が第26代継体天皇の側女となり、長者夫婦の没後、天皇の命を受けて鹿角市の小豆沢・長牛、比内の独鉾に大日堂が建立されたという。

吉祥姫の母(徳子)は独鉾に生まれ、長者伝説の神託を授かったということから、この地がダンブリ長者伝説の発端と考えられている。

※写真は、比内庁舎前にある石碑(ふるさと比内会建立)



石碑に刻まれたダンブリ長者の物語